

比較文化論

No.36

日本比較文化学会第40回全国大会
2018年度日本比較文化学会国際学術大会
発表抄録

於 高知大学

2018年5月18日（金）～20日（日）

日本比較文化学会

The Japan Association of Comparative Culture

（協催）

高知大学

台湾日本語教育学会

（後援）

在大阪インドネシア共和国総領事館（依頼中）
〈公財〉高知県観光コンベンション協会

（海外提携学会）

韓国日本文化学会 台湾日本語文学会
村上春樹研究センター（淡江大学：台湾）

第 40 回 日本比較文化学会全国大会

2018 年度日本比較文化学会国際学術大会

<日時：2018 年 5 月 18 日（金）>

会場：高知市中央公民館（カルポート 10F 工作室）

15:00～16:30 編集委員会

16:30～18:00 理事会

18:15～21:00 海外理事との交流懇談会（高知駅周辺）

<日時：2018 年 5 月 19 日（土）>

会場：高知大学 共通教育 3 号館 3 階（シンポジウム以外は、全てこの建物の 2・3 階）

8:50 受付開始

共通教育 3 号館 3 階（335）

9:15～10:45 総会及び理事会（同上）

11:00～12:10 基調講演（同上）

講師：インドネシア総領事（大阪）

演題：インドネシアから日本をみると（仮題）

司会：奥村 訓代（高知大学）

12:15～13:30 昼食：大学生協の食堂が営業中

（理事の昼食会場は、共通教育 3 号館 3 階（333））

13:30～16:15 研究発表 共通教育 3 号館、2・3 階

研究発表会場には、研究発表用の機器が設置されており、パワーポイントなどの使用が可能です。ハンドアウトは 30 部ご用意いたします。

第 1 会場 321 教室 ・ 第 2 会場 322 教室

第 3 会場 324 教室 ・ 第 4 会場 325 教室

第 5 会場 331 教室 ・ 第 6 会場 332 教室

第 7 会場 334 教室 ・ 第 8 会場 335 教室

第 9 会場 333 教室

（323・R333 は休憩室です。飲料・菓子などを用意しています。）

16:30～17:45 シンポジウム 「比較文化の手法」 共通教育 2 号館 2 階（222）

※各パネリストの発表時間は 8 分です。

司会・パネリスト

藤岡克則（大阪産業大学）

パネリスト（中四国支部・九州支部代表）

藤山和久（広島経済大学）

パネリスト（中部支部・関西支部代表）

白鳥絢也（常葉大学）

パネリスト（東北支部・関東支部代表）

森崎巧一（京都経済短期大学）

パネリスト（韓国日本文化学会代表）

都基弘（同学会学術理事・Hanbat 大学）

パネリスト（台湾日本語文学会代表）

范淑文（同学会副理事長・台湾大学）

18:00～20:00 懇親会

会場：高知大学生協 2 階 共同談話室

会費：4,000 円

準備の都合がありますので、お手数ですが、ご参加いただける方は5月10日（木）までに会費を次の銀行口座にお振り込みくださいますようお願い申し上げます。多くの方のご参加をお待ち申し上げます。

【振込先】

銀行名：四国銀行

支店名：朝倉支店

種目：普通預金

口座番号：5149102

口座名義：日本比較文化学会中国・四国支部

店番：102

<日時：2018年5月20日（日）>

（希望者のみ）

エクスカージョン：高知の「日曜市見学」（7:00から16:00）

「元禄3年（1690年）以来、300年以上の歴史を持つ土佐の日曜市。年末年始とよさこい祭り期間を除く毎週日曜日開催されています。4月から9月は午前5時から午後6時まで、10月から3月は午前5時30分から午後5時まで、高知のお城下追手筋において、全長約1300mにわたり、約420店が軒を並べています。新鮮な野菜や果物はもちろん、金物、打ち刃物、植木なども売られており、市民と県外からの観光客などもあわせると1日に約17000人が訪れる生活市です。（高知市HPより）



(パネリスト発表論題一覧)

16:30～17:45

司会：藤岡克則（大阪産業大学）

(1) グローバル化の時代における比較文化学の役割

藤岡克則（大阪産業大学）

(2) 高専生と私立大学生の英語学習に関する意識の比較
—インタビュー調査を通して—

藤山和久（広島経済大学）

(3) 世界の学校文化を楽しむ
—比較教育学の視点から—

白鳥絢也（常葉大学）

(4) 人の印象情報を用いた科学的なデザイン分析手法（印象評価法）の普及とその可能性
—森崎巧一（京都経済短期大学）

(5) 日韓のお膳における食具の配置について
—相違点を中心に—

都基弘（韓国日本文化学会学術理事・Hanbat 大学）

(6) 文学作品にみる食文化
—漱石文学&村上文学—

范淑文（台湾日本語文学会副会長・台湾大学）

【シンポジウム：パネリスト要旨】

グローバル化の時代における比較文化学への役割

藤岡克則（大阪産業大学）

過去2か年のシンポジウムのテーマは、「比較文化の方法論」、「比較文化の今日的意義」であった。そして今回のテーマは、「比較文化の手法」である。比較文化学の方法論と今日的意義を確認し、そして、今回は、比較文化の研究や教育の手法を、実践という側面から情報共有し、グローバル化時代にふさわしい比較文化学の発展につなげようとする試みである。

本学会には様々な分野を専門とする方々が在籍されている。このことは、比較文化学の研究対象の多様性を物語っているといえる。このような研究対象の多様性は、学問の広がりとともに可能性を示唆している。しかし、同時に研究対象の多様性ゆえに、研究方法論を異にすることになり、学問の基盤としてのプラットフォームが一体どういうものなのかは、個別の研究事象を覗いてみると明確に見えてこないという課題がある。今回のシンポジウムにおいては、比較する対象や内容、そして方法論の多様性を比較文化学の特性として捉えたうえで、研究実践における発想の違いを共有し、グローバル化の時代における比較文化学の新たな可能性を見出し、研究手法のさらなる発展に寄与することができればと願っている。

「教育」「デザイン」「食」をテーマに、異分野交流の面白さ、発想の違いを共有し、個々の実践研究から、新たな発見ができるよう、シンポジウムを進める所存である。

【シンポジウム：パネリスト要旨】

高専生と私立大学生の英語学習に関する意識の比較 —インタビュー調査を通して—

藤山和久（広島経済大学）

英語教育における大きな課題の一つは、学生の英語に対する興味・関心をいかにして高めるかということである。先行研究はこうした課題に対して、教授法や動機づけなどの観点からアプローチしている。しかしながら、学生がどのような意識のもとで英語学習に取り組んでいるのかという点は必ずしも十分に明らかになっていない。さらに、日本の高等教育は、大学のみならず高等専門学校（以下「高専」）も包摂されるものであるが、両者の比較を通じて質的にアプローチした研究は十分に蓄積されていない。それに加えて、両者は高等教育機関であることから一定の共通性を見出すことができるが、制度やカリキュラムが異なっており、学習への取り組みやクラスの雰囲気などに差異があると推察される。

そこで、本報告の目的は、九州地方の高専生と中国地方の私立大学生の英語学習に関する意識を比較し、両者の類似性と差異とを明らかにすることである。

上記の研究目的を明らかにするために、本考察は半構造化面接法をもちいたインタビュー調査を行う。半構造化面接法は、あらかじめ少数の質問項目を用意し、得られた回答に応じて柔軟に質問を行うことができる面接法である。研究対象は高専4年生と私立大学1年生の学生である。インタビューでは、英語学習の目的や授業内外での英語学習の取り組みなどを中心に調査を実施している。

本報告は、上記の研究目的を比較文化的な手法から明らかにすることで、学生の英語学習に関する示唆を示す。

【シンポジウム：パネリスト要旨】

世界の学校文化を楽しむ —比較教育学の視点から—

白鳥絢也（常葉大学）

本発表では、比較教育学の立場からその理論や方法についておさえるとともに、諸外国がどのような教育制度のもとで、どのような教育を行っているかについて紹介する。また、変化の激しい時代に直面しての諸課題を明らかにし、世界の学校の現状を知り、教育にかかわる世界の人びとの思いや願い、知恵などについて触れていく。

そのうえで、明治以降のわが国の教育を見つめ、各国とどのように違うのか、同じなのか、わが国の教育はどのような方向に進むべきなのかを学び取る。さらに、諸外国の教科書やわが国における外国人の子どもへの教育問題についても触れていく。

具体的には、

- ・比較教育学の目的
- ・国際比較による「教育のパターン（類型）」の認識
- ・学校の「時間」文化の比較（学校の始期と終期，6日制と5日制など）
- ・学校の「空間」文化の比較（職員室，教室，運動場など）
- ・学校の「教育様式」文化の比較（校則，体罰，清掃など）
- ・ブラジルの小学校国語教科書を用いた授業実践の紹介

という流れを想定している。

文化は、人々の心の反映であり、鏡である。学校には、そうした学校観・教育観・人間観を映した文化が脈々と流れている。それは、教育における「知恵」、あるいは学校の文化という「癖」「風習」ともいえる。

その国の学校が持つユニークな文化（慣習，慣行，一定のスタイル，雰囲気，異なる性質，傾向など）を明らかにすることで、世界の学校文化、教育文化を楽しむ一つの手がかりとしたい。

※本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金（平成 28-30 年度 基盤研究（C）「国際化社会に生きる青少年の共生を目指した教材モデルの開発に関する研究」課題番号：16K04561，研究代表者：白鳥絢也）の助成を受けて行われたものであり、ここに謹んで感謝の意を添えます。

【シンポジウム：パネリスト要旨】

人の印象情報を用いた科学的なデザイン分析手法（印象評価法）の普及とその可能性

森崎巧一（京都経済短期大学）

我が国では、多くのデザイナーによって多様な作品が世に送り出されている。しかし、既存の作品と類似した作品を発表したために盗用が疑われ、国内外より厳しい批判を受けることがある。このような盗用問題は、デザイナーの主観的・経験的な説明だけで解決することが難しい。したがって、教育研究機関は、このような現状からデザイン業界や良識あるデザイナーを守る術、すなわち、制作したデザインが独創的なものであるという根拠を「客観的に」示すための新たな手法の開発とその教育方法の研究が必要であると思われる。

一方、文系・理系を問わず、デザイン関連科目を擁する高等教育機関の増加により、多くの教員がデザイン教育の現場で教鞭を執っている。教員は作品を評価し、その結果に基づく指導を行うこととなるが、デザイン教育においては、評価者である教員の主観的・経験的な見方が大きな影響力を持つという現状がある。個々の感性を正当な作品評価に繋げるための「客観的な」分析法の検討が必要になると思われるが、実際の教育現場で作品評価に科学的な分析法が導入されるケースは乏しい。

そこで本発表では、「人の印象情報を用いた科学的なデザイン分析手法（印象評価）」の普及と今後の可能性について考察したい。

印象評価は、一定の知識やスキルを必要とする分析方法である。特に分析段階では、必要な分析用データを得るために複雑な分析プロセスが必要となり、このことが印象評価を専門外とする教員にとっては同手法を教育現場で活用する機会を遠ざける一つの理由であると考えられる。そこで近年、教員が印象評価を容易に扱えるよう、専門的知識を必要とする分析プロセスの簡略化を目的として印象評価分析を支援するツール「印象評価サポートツール」を開発し、本学会でも発表させて頂いた。そして現在、作品をより客観的に分析するツールの開発を目標に、科研費により助成を受け、画像解析を導入した印象評価分析ツールの開発研究に注力している。これにより、客観的判断によるデザインの類似性の分析などを可能とし、作品制作にとっても有用なツールとなるだろう。

今後は、印象評価法の適用範囲を拡張させ、人文科学や社会科学の分野で分かりやすく使いやすい道具を開発し、デザイン教育だけでなく、比較文化研究において有用なツールの一つとなるよう、発展させていきたいと考えている。例えば、異文化理解を支援するための印象評価分析ツールの開発が可能である。印象語は日本語以外にも、中国語、韓国語、英語、フランス語など各国の印象語を用意し、デザインや美術作品を対象に、各国の印象の捉え方を比較する研究が展開できる。このように、デザイン分野を超えた学際的研究として発展させ、比較文化に携わる様々な分野の方々と連携しながら、分析ツールをより利用しやすい形へ進化させたい。

【シンポジウム：パネリスト要旨】

日韓のお膳における食具の配置について —相違点を中心に—

都基弘 (Hanbat 大学:韓国)

1. はじめに

匙と箸とを食具として使う文化は中国から伝わってきたものであるが、今日の日本と韓国とでは、食卓に置く際の向きと匙の有無という点において異なった様相を呈している。日本は横向きにして箸だけを使っており、韓国は縦向きにして箸と匙とを使っている違いがあるのである。1980年代の「東アジアの食事文化の研究」や国立民族学博物館の研究の成果であり、これに刺激され韓国の日本学をはじめとする多くの分野で取り上げられてきた。しかし、日韓の食具の置き方における相違点の原因を指摘した論考はあったものの、的を射たとは言い難い。そこで、論者は日韓のお膳における食具の配置方の変遷に注目し、古典籍、絵巻、料理書などの資料から食具の配置方の変遷を通時的に捉えることに考えたのである。

2. 食具の配置方の変遷の現状

韓国の場合、今日では匙と箸を汁椀の右側（飯と汁の真ん中）に縦にして置くのが一般的である。しかし、朝鮮時代の有職故実の資料では、向きは記されていないものの、ご飯と羹(吸い物)の間に置かれる「中央配置型」と、右手側に置かれる「右手側配置型」とが存在していたことが確認できる。また、近代の料理書などでは、「右手側横型」が存在していたことが確認できる。つまり、韓国では「(向きはわからないが)中央配置型」から「右手側横型」へと、さらに今日のような「右手側縦型」へと変わってきたことになるのである。

一方日本の場合、今日では箸だけを真ん中に横にして置くのが一般的である。しかし、平安時代の有職故実の資料では、匙と箸とを二列で横にして真ん中に置いたことが確認できる。ところが、鎌倉時代以降でも箸だけで食事をする絵巻の資料もあれば、匙と箸とで食事をする絵巻の資料や匙と箸が記されている有職故実の資料もあり、今日のような配置型がいつからなのかが特定しにくいのが現状である。

3. 今後の課題

先行研究において日本の場合には「10世紀に中国との公式の外交関係がなくなると、貴族たちは匙の使用をしだいにやめ、すべての日本人が箸だけで食事をするようになった」という。しかし、先述したような例があり、「すべての日本人が箸だけで食事をするようになった」時期を一概には言えない。そこで、論者が注目しているのが、大饗のことを書き留めている室町時代の『大饗記』という記録である。これの指図には匙が描いてあり、室町時代でも一部かもしれないが匙と一緒に使われていた痕跡を確認することができる。このような大饗の記録を確認し、箸だけの食事を特定することを目指している。

【シンポジウム：パネリスト要旨】

文学作品にみる食文化 －漱石文学&村上文学－

范淑文（台湾大学：台湾）

比較文化に言及する際、様々な定義があろうが、両者の対象から異なる表現、異文化を見いだすのを目的と図る手法は最もシンプルな解釈も有りうるであろう。その時、異文化とは文字通り、異なる文化であるため、国が異なる文化を指すというのは一般的な捉え方であろう。

そのような異文化の理解はつまり、空間的な捉え方である。しかし、時間的な視座より考えていけば、同じ国でも異なる時代の両文化の比較というのも広い意味における比較文化とする考えも成り立つのではなかろうか。同じ国であるが、時代が異なったため、違った外部の要素の受容や影響で文化には変化が生じることは十分にありうるからである。

また、文学作品とは作者が自分の生きている社会の様子や文化を自分の目を通して記録したものであるため、文学作品を比較、分析の材料とする研究も比較文化の一種と考えるもよからう。

以上の理由で、ここで文学作品、同じ日本の国民作家と称せられている夏目漱石と村上春樹の作品の比較を通して作品に描かれている文化の異なりを見出すことを主旨とする。

食事や招待などは一つの国、家庭の文化を最もよく反映している文化であることは誰も納得できるだろう。漱石の作品『虞美人草』におけるお茶や食事の幾つかの場面、また『道草』の健三が姉や親戚にご馳走をされた幾つかの場面がある。それらの場面はその時代の文化、あるいは作者自身のイデオロギーの反映につながると思われる。一方、ほぼ百年近く離れた1970年代より創作を始めた村上春樹の作品、例えばデビュー作である『風の歌を聴け』や最も人気のある作品の一つである『ノルウェイの森』には食事の場面がよく織り込まれている。その食事の場面は漱石文学に描かれている場面とは中身や雰囲気異なるほか、その食事や茶会の持つこと機能もかなり異なっている。

漱石の時代は近代化の始まったばかりの時代であり、その衝撃的なもの――西洋文化への受容か拒否――は時代性のみならず、外来文化の反映とも考えられよう。言い換えれば、単なる日本、明治時代の文化に止まらず、西洋文化が混じった日本文化と見なすことができよう。一方、ポストモダンを生きる村上春樹のなかにある食事のスタイルやそのなかにある意味も漱石の時代のそれとはかなり隔たりがある。両者の作品に描かれている食事に臨む主人公の描写やその食事の前後の設定などを通してそれぞれの時代性、その時代の文化の一端にアプローチすることを試みたい。

【研究発表】

ポスター発表：323 教室

12：15～13：30、

および 15：00～15：15

浅井了意における『廻吉録』の受容 ―仏教との関係を中心に―

董航（お茶の水女子大学博士後期課程）

【研究発表】

第1会場：321 教室 《文学研究領域》

(司会：佐藤和博 弘前学院大学)

1. 13:30～14:00

土日自然主義文学作品に見られるガヴァネス

—『地獄の花』とMurebbiye (家庭教師)の比較を中心に—

コチート ズハル (筑波大学大学院博士後期課程)

2. 14:00～14:30

日本文化に見る漱石の漢文学

呉雪虹 (高雄市立空中大学:台湾)

3. 14:30～15:00

村上春樹文学における自己と他者との対話

葉菱 (淡江大学:台湾)

休憩 (15:00～15:15)

(司会：北林利治 京都橘大学)

4. 15:15～15:45

「魂」が惹かれあう？

—ギリシア哲学とロマン派運動から村上春樹の『1Q84』と新海誠の『君の名は。』まで—

横道誠 (京都府立大学)

5. 15:45～16:15

エコフェミニズムの視点から読む『チェルノブイリの祈り』

—チェルノブイリと福島から発信する平和への対話に注目しつつ—

曾秋桂 (淡江大学:台湾)

【研究発表】

第2会場：322 教室 《文化と社会研究領域》①

(司会：伊藤豊 山形大学)

1. 13:30～14:00

小原豊雲とプリミティヴィズム-いけばなの取り組みから

篠原華子 (筑波大学大学院博士後期課程)

2. 14:00～14:30

神谷美恵子の活動と業績

野田晃生 (筑波大学大学院博士後期課程)

3. 14:30～15:00

日本国内カトリック系組織の外国人児童生徒への多文化教育の関わり

—カトリック新聞と CTIC ニュースレターの文献考察を基に—

奴久妻駿介 (一橋大学博士後期課程)

休憩 (15:00～15:15)

(司会：林裕二 西南女学院大学)

4. 15:15～15:45

一般・救護施設比較による生きがい感調査研究

藤渕明宏 (救護施設ひびき園指導員)

5. 15:45～16:15

ベルギー・フランドレンの文化政策における「インターカルチュラリズム」の受容

井内千紗 (国際短期大学)

【研究発表】

第3会場：324 教室 《文化と社会研究領域》②

(司会：近藤俊明 東京未来大学)

1. 13:30～14:00

クリント・イーストウッド西部劇に関する一考察
—『グラン・トリノ』のマイノリティー表象を中心に—

深津勇仁 (慶応義塾大学大学院博士後期課程)

2. 14:00～14:30

高等学校応援団の演舞に関する研究
—伝統校の身体動作における儀礼的要因の分析—

岩崎智史 (東京未来大学)

金塚基 (東京未来大学)

3. 14:30～15:00

「自然共生社会」規範の伝搬に関する研究 —生物多様性への取り組みを事例として—

横田匡紀 (東京理科大学)

休憩 (15:00～15:15)

(司会：砂川典子 九州ルーテル学院大学)

4. 15:45～16:15

クィア・ゴシックの視点で読む *Reflections in a Golden Eye* の映画アダプテーション
『禁じられた情事の森』

岩塚さおり (名城大学)

5. 16:15～16:45

文章・談話のスタイルに対する、メディアを踏まえた分類試案

大谷鉄平 (長崎外国語大学)

【研究発表】

第4会場：325 教室《英語研究領域》

(司会：山崎祐一 長崎県立大学)

1. 13:30～14:00

初級英語学習者の文産出促進のための指導法に関する提案
—制限英作文における主語の設定を中心に—

橋尾晋平 (同志社大学大学院博士後期課程)

2. 14:00～14:30

Is Karate Useful for Daily Life?
— A Study on Sri Lankan Karate Practitioners' Awareness

Petra Karlova (Waseda University)

3. 14:30～15:00

How Cultures Shape Our Preferences and Values:
A Study on Young Females Living in Japan and Brazil

Takayo Sugimoto (Aichi University Junior College)

Narumi Hashimoto (Aichi University Junior College)

休憩 (15:00～15:15)

(司会：中村友紀 関東学院大学)

4. 15:15～15:45

日本人大学生英語学習者の発話する英語母音について

高橋栄作 (高崎経済大学)

5. 15:45～16:15

体育会系学生への英語指導改善への道筋
—アメリカ大学における体育会系学生教育との比較を通して—

細江哲志 (横浜商科大学)

白須洋子 (横浜商科大学)

東本裕子 (横浜商科大学)

清水スタンボーグ恵子 (横浜商科大学)

【研究発表】

第5会場：331 教室 《日中研究領域》

(司会：神崎明坤 西南女学院大学)

1. 13:30～14:00

漢字についての認知的日中文化対照研究
—植物に関する漢字を中心に—

段静宜 (関西外国語大学大学院博士後期課程)

2. 14:00～14:30

広東語と日本語の比較の試み

周聖來 (アーキヴォイス横浜校・スクール長)

3. 14:30～15:00

発表辞退

休憩 (15:00～15:15)

(司会：山下明昭 香川大学)

4. 15:15～15:45

メタファーによる説得力に関する一考察
—日中公共広告表現の比較を通して—

黄琬詒 (同志社大学大学院博士前期課程)

5. 15:45～16:15

疎開学寮教師の心情
—北京日本人学校教師小川一朗のその後、未刊歌集の紹介を中心に—

向野正弘 (向野堅一記念館館長・埼玉県立所沢西高校)

【研究発表】

第6会場：332 教室 《日韓研究領域》

(司会：八尋春海 西南女学院大学)

1. 13:30～14:00

韓国の大学における日本語学習者の日本及び日本人のイメージ
—日本語・日本関連専攻者と非専攻者の比較—

金元正 (九州大学大学院博士課程)

2. 14:00～14:30

韓国と日本における「多文化の子ども」への教育支援に関する考察

申芸花 (九州大学大学院博士後期課程)

3. 14:30～15:00

在朝鮮日本人の映画活動に関する研究
—1910年代の京城を中心に—

朴起範 (関西大学大学院博士後期課程)

休憩 (15:00～15:15)

(司会：山内信幸 同志社大学)

4. 15:15～15:45

複合動詞から見た日本文化

李暻洙 (韓国放送大学：韓国)

5. 15:45～16:15

「断り」における冒頭発話の意味公式分析
—日本語母語話者とインドネシア人スンダ語母語話者の比較—

ノフィア・ハヤティ (金沢大学院生)

【研究発表】

第7会場：334 教室 《地域社会研究領域》

(司会：金志佳代子 兵庫県立大学)

1. 13:30～14:00

準正課教育における防災教育の実践－社会的汎用能力の養成の観点から

藤巻 晃 (徳島文理大学)

桃井克将 (徳島文理大学)

多田一子 (徳島文理大学)

藤本正己 (徳島文理大学)

2. 14:00～14:30

日本語教科書から学ぶ防災対策

－日本語学習者が学ぶ日本語と防災－

公文素子 (高知大学)

3. 14:30～15:00

多文化「共創」社会に求められる人材

－不動産業界の留学生生活用事例についての一考察－

郭潔蓉 (東京未来大学)

休憩 (15:00～15:15)

(司会：奥村訓代 高知大学)

4. 15:15～15:45

地域文化の振興と消費活性化を目指して

－新たな魅力発信に向けた取り組み－

関口英里 (同志社女子大学)

5. 15:45～16:15

地域連携による「英語で交わる街づくり」の活動を通じた異文化共生と市民の英語力改善の取組

山崎祐一 (長崎県立大学)

【研究発表】

第8会場：335《海外論研究領域》

(司会：佐藤静 宮城教育大学)

1. 13:30～14:00

ドイツの学生歌「ランデスファーター」とフリーメイソンリー

五十棲愛璃乃 (京都外国語大学大学院博士後期課程)

2. 14:00～14:30

19世紀におけるドイツ教養市民層の名誉と決闘

菅野瑞治也 (京都外国語大学)

3. 14:30～15:00

オーストラリアの高等教育システム改革期における大学副学長の思想と実践

澤田敬人 (静岡県立大学)

休憩 (15:00～15:15)

(司会：澤田敬人 静岡県立大学)

4. 15:15～15:45

インターンシップに関する政策的言説とその実践

一文藻外語大学の実践例を中心に

董莊敬 (文藻外語大学：台湾)

5. 15:45～16:15

台湾における日本語とその表現文化の機能

—海外文化に対するグローカル化の成功事例として—

落合由治 (淡江大学：台湾)

【研究発表】

第9会場：333《文学研究領域・海外論研究領域》

(司会：梶原雄 同志社大学)

1. 13:30～14:00

文体についての考察 —イシグロ・カズオ「浮世の画家」より—

林裕二 (西南女学院大学)

2. 14:00～14:30

『春』の基本構造

林盛奎 (白石大学校：韓国)

3. 14:30～15:00

日系ブラジル人のネットワーク活動が帰属意識に与える影響研究

林永彦 (全南大学校：韓国)

金泰永 (江陵原州大学校：韓国)

休憩 (15:00～15:15)

※後半は休憩室として使用します。

【研究発表論題と要旨】ポスター発表

12:15-13:30、および15:00-15:15

浅井了意における『迪吉録』の受容

—仏教との関係を中心に—

董航（お茶の水女子大学博士後期課程）

浅井了意（生年不詳-1691）は近世前期の仮名草子作家・真宗大谷派僧侶であり、仮名草子も仏書も数多く世に伝えている。従来は、文学・文芸の側面に着目して、了意の個々の作品に対する典拠調査がなされてきた。教訓書『堪忍記』、遍歴小説『浮世物語』が共に中国明末の顔茂猷（1537-1637）著『迪吉録』を取り入れたことは、従来の研究で明らかになっている。しかし、唱導教化を本懐とした了意が勧善を基調とする『迪吉録』をどのように捉えたのかといった思想内容にわたる考察は十分に行われてこなかった。

本発表は、『迪吉録』を借用した中江藤樹（1608-1648）の『鑑草』、上記の了意の二作が受容した『明心宝鑑』も考察対象に入れ、了意が仏者の立場から『迪吉録』を受容した際の特徴を示すことを目的とする。具体的には、まず『堪忍記』と『鑑草』における『迪吉録』の取り入れ方を比較する。次に『迪吉録』と『明心宝鑑』が『堪忍記』・『浮世物語』でどう受容されているかを比べる。最後に、以上の比較検討に沿って勧化僧としての了意の立場に留意しつつ、中国勧善思想や説話に対する彼の態度を考察する。

これらの考察を通じ、藤樹が仏教を包容する態度で『迪吉録』を借用し、自らの主張する「孝」思想を『鑑草』において説き示したのに対し、了意は儒・道教への接近を図り、人倫道德に仏教思想をつけ加え、唱導・勧化の立場から『迪吉録』を説き直し、『堪忍記』と『浮世物語』に取り入れたことを指摘する。即ち、了意は三教一致を擁護しながら、自らの巧緻を極めた文筆を活かし、仏者の立場から念仏・読経・三世因果応報思想等の強調を巧妙に原典の説話に織り込む形で、『迪吉録』を取り入れた。そのような意味で、了意の受容は、積善を促し民衆を救済するという茂猷の勧善思想に対する継承・発揚・昇華でもありと見なすことができる。

『堪忍記』と『浮世物語』には、『迪吉録』のみならず、『明心宝鑑』に依拠する説話も多く含まれる。つまり、了意は異国の説話を広範囲にわたって探し求め、仏法を唱導し人間を教化する話材として活用していたと考えられる。今後は、このような了意の勧化活動を江戸前期の歴史背景と照らし合わせて考察し、その社会参加仏教的な意義を見出したいと考えている。

【研究発表論題と要旨】 第1会場

1. 13:30～14:00

土日自然主義文学作品に見られるガヴァネス —『地獄の花』と *Murebbiye* (家庭教師)の比較を中心に—

コチート・ズハル (筑波大学大学院博士後期課程)

19世紀末頃にフランスを中心とした自然主義文学は他の国の文学にも強い影響を与えた。定義者のエミール・ゾラ(1840年～1902年)は同時代人には自然主義の根幹を表象するものであり、フランスだけではなく他の国でも多く読まれた作家であった。トルコも日本もほぼ同じ時期にフランス自然主義文学に面した。両国の自然主義文学の初期作品にはゾラの影響が見られる。本発表はトルコ文学と日本文学における近代的発展の程度の共通性に着眼し、ゾラ其自然主義文学から影響を受けたトルコ文学と日本文学の自然主義について研究したものである。具体的にトルコ人作家 Gurpinar, Huseyin Rahmi (ギュルプナル・フセイン・ラフミ、1864年～1944年)の *Murebbiye* (家庭教師、1899年)と永井荷風の『地獄の花』(1902年)におけるゾラを受容を比較し、それぞれの作品の特質を明らかにする試みである。

一方、自然主義文学の影響で書かれた二つの作品には自然主義文学にはない類稀な特徴がある。それは主人公が家庭教師であることだ。*Murebbiye*も『地獄の花』もガヴァネス小説の跡があると言える。欧州文学にはガヴァネス小説と自然主義文学の関連性が殆どない。二人の作家はゾラをいかに受容し、なぜ自然主義とガヴァネス小説を組み合わせ、作品を創作していたか疑問が残る。

19世紀末頃からオスマントルコ社会に外国人の家庭教師が登場し、学校に通えない富家の女子に教えることになった。同時代の他の作品にもフランス人の家庭教師が登場人物として現れていたが、主人公である家庭教師はこの作品しかなかった。さらに、*Murebbiye*のフランス人の家庭教師は実際に娼婦であることも、それまでの作品に描かれなかったことである。その結果、作品の中に『ナナ』にも言及した作家は『ナナ』の好評に触られ、この作品は『ナナ』に喚起されたことが明らかとされている。ナナのような主人公を生み出そうとしている作家は実際にオスマントルコ社会で存在しているフランス人の家庭教師のことを舞台としていると考えられる。

『地獄の花』の主人公も同時代の作品に比べ、新たな人物であったが、実際の社会で存在した家庭教師が少なかった。荷風がゾラ其自然主義に触られ、人生の暗黒面を観察したこの作品は同時代に存在していた女性教師についてその時まで書かれた言説と同じく「職業」か「結婚」かという言説の集まりである。荷風は新たな人物を登場させたこの作品には読者に違和感を感じさせたかったのではないかと考えられる。

【研究発表論題と要旨】 第1会場

2. 14 : 00 ~ 14 : 30

日本文化に見る漱石の漢文学

呉雪虹（高雄市立空中大学教授：台湾）

生活は文化の一環ではなく、すべてだと思われる。商売上では信用を第一と、人間関係では道義を重要視、するものが信頼できると認められる。『莊子』内篇の《逍遙遊篇》では逍遙遊の主旨を、日本の学者は「とらわれのない自由なのびのびした境地に心を遊ばせること、とらわれのない自得の楽しさ」という解釈がある。漢文学がもっとも盛んでいた江戸時代に生まれ、明治時代で成長した漱石は築き上げた数多くの文学作品では道義を第一に主張している意志が強く感じられる。その中では作中人物の視点とか評言を借りて漱石の理念を表現している。だが、晩年の『道草』は漱石が自分の心底に暗闇のように存在した養子時代を告白したとされるものである。

出勤の際、養父に出会ったとたんに、養子時代の記憶が甦ってきた。養父母に可愛がっていた箇所をひとつひとつ取り上げて感謝の意を表している。その代わりに自分が恩義を仕込まれているところに対しては、腑に落ちないように感想を漏らしている。特に養母の方が養父の浮気を口実に養子の自分を独り占めるつもりでとった言動に嫌気をした。しかも、自分が養父母の老後のために引き取られて、育てられたような存在に気づいた。だが、実家に戻った同時にすでに手切れ金を養父母に渡したにもかかわらず、再会になった養父から養ってほしいと無心されたとしても、姉も兄ももうそんな必要がないと主張した。

一方、実生活では細君がこっそり質屋に入ったり、兄に借金したりするような生活難を語る。夫に見捨てた同然の姉にも、月に若干彼女の生活の足しになる金銭を貢いでいる。これは自分が冷たい人間ではない証になる点なのだ。また、養父が尋ねてくる度に、五円ぐらいを渡していたが、満足してもらえなかった。養父の友人が老後の面倒をみてくれと強請ってきた。この際、はっきりと二度目の手切れ金を今後一切関わらないという約束で払った。その手切れ金は二百円で、作者が借金して調達した。これも当時の生活難を明らかにする証拠だろう。養子時代がお世話になったお礼は親父から払ったが、自分はまだ一度その恩義を生活難の現実を超えても友人から借りたお金で果たした。恩義を大切に思っているからこそ、道義を尊重する表現の一つである。『道草』はフィクションではなく、告白の文学で、漱石が養子時代の経験を交えて、現実の経済生活状況を無視して恩義主義の下で、再び方付いたのは道義を第一とする故である。

【研究発表論題と要旨】 第1会場

3. 14 : 30 ~ 15 : 00

村上春樹文学における自己と他者との対話

葉凌 (淡江大学助理教授：台湾)

村上春樹の小説に描かれる自己と他者との関係はよく取り上げられる研究テーマである。他者の不在・欠如というのは、90年代までの村上春樹作品の特徴の一つだと論じられている。確か村上春樹の初期作品において、自分の殻に閉じ込む主人公はよく登場して、自己の内面に対する探求はしばしば作品の主題になっている。ただし、それは決して他者の影響力が存在しないというわけではない。主人公が作品の背後に潜んでいる「不在としての他者」と対比させられ、それによる主人公の自己確立は見られる。

一方、分身というテーマもよく見られる要素である。デビュー作『風の歌を聴け』に登場する「鼠」は語り手「僕」の分身としての存在だと思われる。こうして、「鼠」は「僕」にとって自己であると同時に他者でもある。また、2017年に出版される最新作『騎士団長殺し』において、他者との連繋が切断された語り手「私」は他者との交流を通して自己に対する新たな発見を遂げる。

以上のように、村上春樹の作品で自己と他者との関係は固定した形で表現されているわけではなくて、常に違う手法で表われるものでなる。本稿では自己と他者との対話をテーマにして、村上春樹文学における自他の交流を究めようとする。

キーワード

自己、他者、深層心理、語り、分身

【研究発表論題と要旨】 第1会場

4. 15 : 15 ~ 15 : 45

「魂」が惹かれあう？

—ギリシア哲学とロマン派運動から村上春樹の『1Q84』と新海誠の『君の名は。』まで—

横道誠（京都府立大学准教授）

古代ギリシアのプラトンによる対話篇『饗宴』で語られる、いわゆる「人間球体論」。かつて人間は2つの頭と2つの手足を持っていたが、神によって分割されたため、現在の人間は切り離された半身を求める。魂が惹きあうように。

魂が惹かれあうという発想は、「運命の赤い糸」として東アジアでも一般的だった。古くは北宋の『太平広記』にも収められた伝承があり、21世紀の日本人にも広く知られた観念と言えよう。

18世紀の欧州では、「ロマン派」の価値観が形成された。ドイツではシラーが「歓喜の歌」を発表し、19世紀前半にはベートーヴェンが、その交響曲第9番第4楽章の合唱歌としてこれを採用した。この詩では、「この地球上でただひとつの魂でも、それが自分の魂だと言えることができる者」は、ともに歓呼の声をあげようと誘われる。

この時代に、読み書きのできる男女、あるいは男同士や女同士は、互いに手紙を交換し合って、その「魂」を晒けだし、魂の惹きあいを求めようとした。フランスのルソーによる『ジュリ—新エロイズ』のような書簡体が人気の小説形式になった。英国の詩人コールリッジは、ある手紙のなかで「結婚生活で幸せになる」ために、あるいは「惨めにならないようにするために」、「家庭や相方と同じようにしてソウルメイトを持たなければならない」と書いた。惹かれあう魂を形容するために、この「ソウルメイト」という言葉は今も多用される。

オカルティズムやニューエイジ運動の文脈で惹かれあう魂は語られ、「ツインフレーム」（双子の焰）や「チャクラ」や「カルマ」といった秘儀的な観念と関係づけられる。文学や芸術、そして各種エンターテインメント作品でも、惹かれあう魂は「ロマンティック・ラヴ」の燃料源として衰えぬ人気を誇っている。

この発表では、これらの歴史的背景を概観し、整理を加えた上で、村上春樹の短編『4月のある晴れた朝に100パーセントの女の子に出会うことについて』と、その発展的作品と言える長編小説『1Q84』、さらに村上春樹に影響を受けた新海誠のアニメ映画『君の名は。』に考察の焦点を絞っていく。世界史的な視野を意識しながら、現代日本の創作物について考察する試みである。

【研究発表論題と要旨】 第1会場

5. 15 : 45 ~ 16 : 15

エコフェミニズムの視点から読む『チェルノブイリの祈り』
—チェルノブイリと福島から発信する平和への対話に注目しつつ—

曾秋桂（淡江大学教授：台湾）

スヴェトラナ・アレクシエーヴィッチが2015年にノーベル文学賞を受賞したことはまだ記憶に新しい。彼女の受賞を契機に、原子力発電所事故に遭遇した人々の証言を取り上げた『チェルノブイリの祈り』が、地震、津波、放射線被害に襲われた東日本大震災(2011年3月11日、通称「311」)後の日本で再び脚光を浴びるようになった。「チェルノブイリ」と「福島」は、その原発爆発で世界に平和への対話を訴える力のある記号となった。

アレクシエーヴィッチだけではなく、化学薬品や農薬による環境破壊の問題を摘発したレイチェル・カーソン『沈黙の春』(1962)はアメリカ政府の環境政策を変えるほど大きく貢献した。日本でも長年にわたり、水俣病患者と一緒に戦い、書き続けた石牟礼道子『苦海浄土』が公害告発の文学として位置づけられている。そして、「日本のレイチェル・カーソン」と呼ばれる有吉佐和子の『複合汚染』は日本の公害防止政策転換の契機として評価されている。また、『祭りの場』などの原爆文学創作に専念した林京子、『献灯使』などの原発文学創作に力を注いだ多和田葉子もいる。人間の生存に脅威を齎した一大惨事と女性の活躍との関連については、エコフェミニズム(eco-feminism)の視点による開拓が目覚しい。

311以降、論者は原発文学研究を進め、そして、ネイチャーライティング(nature writing)、エコクリティシズム(ecocriticism)、エコフェミニズム(eco-feminism)へと辿り着いたが、エコフェミニズムの用語の由来、起因・誕生、分類、定義・変遷などを順に振り返り、整理したうえ、渡久山清美・渡久山幸功がエコフェミニズムについて下した広汎な定義を参考に、「あらゆる抑圧を生産する支配関係を問い直す」ことをエコフェミニズムの定義・指針とし、『チェルノブイリの祈り』を考察した。かつてない試みとしての考察を試みた結果、「チェルノブイリ人」用語の誕生、戦争よりも悲惨なチェルノブイリの現実、国家の絶対的権威への抵抗からは、チェルノブイリ原子力発電所事故に遭遇した人々の苦難とロシアをめぐる地域の悲惨がそれぞれの証言から浮上している。福島人の証言と対照比較すると、そこに共通の背景を持ったチェルノブイリと福島の両地域の人々が発信する平和への希求が見られ、自分たちを受け入れてくれる世界環境の可能性への示唆がある。彼らのささやかな平和への願いを、本研究の成果を通して広く世界に知らせたい。

【研究発表論題と要旨】 第2会場

1. 13:30～14:00

小原豊雲とプリミティヴィズム-いけばなの取り組みから

篠原華子（筑波大学大学院博士後期課程）

小原豊雲は（1908-1995）は、いけばな小原流の三世家元として知られている。小原流は19世紀末に「盛花（もりばな）」というスタイルを確立させ、近代いけばなの流れのひとつを形成した流派である。豊雲は盛花の様式を踏襲しながら、時代の流れに沿った新しいいけばなの開拓を目指した。多方面に向けて小原流を発展させた豊雲の活動の根幹には、幼少期から怪奇なものや幻想的なものに惹かれたことから繋がるシュルレアリスムへの関心がある。豊雲は24、5歳の頃（1932、33年頃）に大阪で上映された前衛映画を見たことをきっかけとして、シュルレアリスム絵画に関心が向かい、サルバトール・ダリ（Salvador Dali, 1904-1989）、イヴ・タンギー（Yves Tanguy, 1900-1955）、マックス・エルンスト（Max Ernst, 1891-1976）などに影響を受けたと述べている。シュルレアリスムへの関心は豊雲のいけばなを近代美術へと接近させ、彼の作品は「超現実主義的傾向を大胆に展開した」と評価されている。一方で、三頭谷鷹史は豊雲の作品の特徴として、シュルレアリスムよりもプリミティヴィズムの傾向を評価している。

本発表では、豊雲のシュルレアリスムとプリミティヴ・アートへの眼差しに連続性を見出す。そして、豊雲がシュルレアリスムの傾向やプリミティヴィズム的要素を作品において表現するきっかけとなった宮武辰夫（1892-1960）の原始芸術コレクションとの関わりから、豊雲の作品におけるプリミティヴ・アートの影響を考察する。豊雲のいけばなが、ジャンルを超えて同時代の美術とどのように連動し、戦後に広く展開された前衛的ないけばなの作風にどのような影響を与えたのか、プリミティヴィズムの視点から検証する。

【研究発表論題と要旨】 第2会場

2. 14 : 00 ~ 14 : 30

神谷美恵子の活動と業績

野田晃生（筑波大学大学院博士後期課程）

神谷美恵子(1914-1979)は、日本の精神科医である。彼女は、ハンセン病療養施設である長島愛生園に勤務した精神科医として知られる他に、ミシェル・フーコー(Michel Foucault)、グレゴリー・ジルボーク(Gregory Zilboorg)、マルクス・アウレリウス(Marcus Aurelius Antoninus)らの著作を日本語に翻訳したこと、ヴァージニア・ウルフ(Virginia Woolf)の病跡学研究等において知られる。

彼女についての先行研究を見ると、ハンセン病と戦った医師としての先行研究が多く見られる。また、ハンセン病隔離政策に対する批判も見られる。

本発表においては、ハンセン病医療に加えて、精神医学の面に重点を置いて、神谷美恵子について論じる。また、医学と同時に、人々が生きる社会の状況についても論じることを目的とする。彼女が活動した時期や、『生きがいについて』（初版は1966年）を執筆・発表した時期から見て、現在の医学・社会には、かつてのものと比較して、変化した面・変わらない面のどちらも考えられる。

たとえば、医学の面においては、彼女の時代から飛躍的に進歩しており、特に彼女が立ち向かったハンセン病については、特効薬ができたこともあり、改善が見られている。しかし、精神医学の面について見ると、いまだにうつ病、統合失調症等の精神疾患、精神障害については決定的な治療法はできておらず、精神疾患・障がいに対する偏見や差別もいまだに残っている。

本発表では、精神医学の面に着目し、神谷美恵子の業績が今日に生きる我々にとってどのような意義をもつか、について論じる。

医学から転じて社会の方に目を向けると、終身雇用が原則であった彼女が活動した時代と比較して、現代社会においては、ブラック企業における全人格労働、先の見えない非正規雇用の労働のための将来への不安等によって、生きがい・充実感をもつことができない人々も多い。

それらの現代の社会の状態を考える時、神谷美恵子の業績や著作は人々にとってどのような意味をもつか。彼女は、人々がどのように生きがいを見出し、生きようとしたのかについて、そして社会に生きる人々全てに対して生きがいをもつことの重要性についての著作を遺した。その論は、医師としての書であるとともに、いかに生きるべきか、ということに対して訴えかけるものであり、社会に生きる人々に考えさせるものであった。彼女の思想を、現代に生きる我々はどのように考えるべきか、について本発表では論じる。

現代に生きる我々が神谷美恵子の活動や業績どのように受けとめ、より生きがい・充実感をもって生きることに繋げることができるか、ということについて、彼女の著作や活動の記録を読み解き、検討することによって提示する。

【研究発表論題と要旨】 第2会場

3. 14 : 30 ~ 15 : 00

日本国内カトリック系組織の外国人児童生徒への多文化教育的関わり ーカトリック新聞と CTIC ニュースレターの文献考察を基にー

奴久妻駿介（一橋大学大学院博士後期課程）

1. はじめに

本研究は、60年代から2010年代にかけての日本国内におけるカトリック系組織が、どのように外国人児童生徒の教育に関わってきたかを明らかにするものである。研究背景として、外国人児童生徒を対象にする際、日本では公立学校や外国人学校、地域日本語教室等が調査地として選定されることがこれまでの研究には多く、カトリック系組織を対象としたものが少ないことが挙げられる。カトリック系組織はオールドカマー、難民、ニューカマーそれぞれの児童生徒の「居場所」やケアの場として機能してきた背景があるが、そういった状況を歴史的に考察してきた研究や報告は限られている。このことから、外国人児童生徒の教育にカトリック系組織が果たしてきた役割について整理と考察することが重要であると考えた。

2. 研究方法

本研究では、第一に、考察する資料として週刊紙であるカトリック新聞を選定した。他にもカトリック系組織の雑誌『声』、キリスト新聞も閲覧してみたが、外国人児童生徒の教育に関する記述は記事が少なかった。このため、カトリック新聞に焦点を絞ることとした。計234点収集した。第二に参考にした資料は、カトリック東京国際センター（以下、CTIC）のニュースレターである。CTICは、1990年、東京教区100周年事業として国際化する教会、社会に奉仕するセンターとして設立され、今年で27年を迎える組織である。91年以降のCTICニュースレターの外国人児童生徒の教育に関する記事を閲覧させてもらった。CTICニュースレターは全て外国人・難民に関わる記事なので、とりわけ子どもを対象にした記事を収集記事として27点を選定した。

3. 結論

資料を整理して明らかになったことは、カトリック系組織の外国人児童生徒の教育への関わり方が「生活」から始まり、難民生徒の「進学」そして、ニューカマー児童生徒の「不就学」「いじめ」「不登校」への視点へと移行した過程である。このことを、更に一般化してみると、インフォーマルな「生活」サポートから始まり、ノンフォーマル教育的要素としての「進学」サポートを通じたフォーマル教育への接続が行われ、最後に、フォーマル教育内部の教育問題へと問題意識が変遷を辿っていったということである。

4. 15 : 15 ~ 15 : 45

一般・救護施設比較による生きがい感調査研究

藤渕明宏（救護施設ひびき園指導員）

北九州市にある救護施設（救護施設は、身体上又は精神上著しい障害があるために日常生活を営むことが困難な要保護者を入所させて、生活扶助を行うことを目的とする施設）（以下「施設」）利用者の生活において、昼間でも多くの方が横になっている姿が見られ、生きがい感の高める要因を見出そうとした。

そのためには、グループホームなど福祉施設居住者を除いた宮若市の市民（以下「一般」）と施設を比較するために、それぞれを対象にして平成29年3月から4月にかけて近藤勉*作成による図1の高齢者向け生きがい感スケール16項目（K-1式）（以下「K-1式」）及び図3の生きがい感のセルフ・アンカリングスケール1項目（以下「セ・スケール」）、性別、年齢などフェイスシート11項目（以下「フェイス」）による計28項目のアンケートを作成した。それを老人会、町内会等に対して、それぞれランダムに配布。標本670回収（回収率74%）し、有効標本647（有効回収率71%）を得た。さらに施設には、利用者に88票配布し80票を回収（回収率90.9%）し、有効標本64（有効回収率72.7%）を得た。

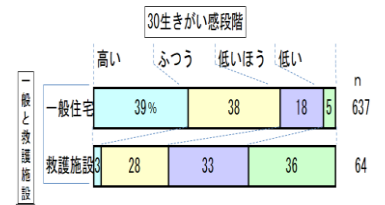


図1 生きがい段階 一般と施設との

*近藤勉 生きがい感を測る ナカニシヤ出版 pp.156-159 2007

その結果、K-1式（64点満点）による一般と施設の生きがい感のクロスは図1となり、二者間は大きな差（ $p<0.001$ ）を見出した。その度数分布は図2となり、セ・スケール分布（図3）との相関係数は0.75($p<0,001$)であった。

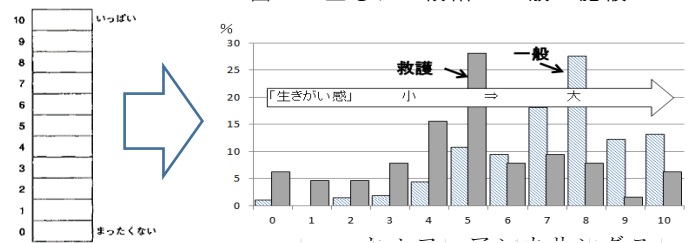


図2 セルフ・アンカリングスケールと一般と施設居住者

主な分析方法は、一般標本647、施設標本64でもって、それぞれの平均の差t検定、調査項目 χ^2 検定、さらにセ・スケールを目標変数としてK-1式及びフェイスそれぞれ重回帰分析を行い、次のように分析結果をまとめた。

主な結果 一般と施設との比較から次の分析結果を得た。

- 1) 調査各項目平均値で一般が施設を有意に全て上回った。
- 2) 平均差をソートした結果の表1のようにK-1式、またフェイスの項目において、人とのかわり意味の強い項目がどちらのシートに表れた。
- 3) セ・スケールを各個人の生きがい感に影響を与えた項目を見出すために、目標変数にして重回帰分析を行い、その与えた大きさの順にソート結果の一部が表2である。この表の全てが人にかかわるものである。

以上から、生きがい感の高めには、深く人とのかわりが影響を与えているといえる。

項目	平均差	片側P値
生き	16私を期待・頼りに	1.29 ***
	10世・家族為の実行	1.97 ***
表1	一般と施設との平均差情報	
	1外での役割有無	1.23 ***
フェイス	23勤務有無	1.808 ***
	27同居人数	1.310 ***
	20友人人数	1.028 ***

変数	偏回帰係数	判定
20友人人数	0.4248	***
8張り合い感	0.4068	***
3心の抛り所あり	0.3636	***
14他からの認め思う	0.3617	***
16私を期待・頼りに	0.2905	***

5. 15 : 45 ~ 16 : 15

ベルギー・フランドレンの文化政策における「インターカルチュラリズム」の受容

井内千紗（国際短期大学専任講師）

本研究は、社会統合モデルとしてのインターカルチュラリズム（Interculturalism）が、ベルギーの文化政策における文化の解釈に与える影響について、考察するものである。

インターカルチュラリズムは、多文化主義をめぐる議論から派生して生み出された、異文化間の対話や相互行為を推進する概念である。2000年代に入り、国際連合やヨーロッパ連合をはじめとする国際機関による宣伝活動の影響で、グローバル化が進み「移民国」時代を迎えている欧米諸国に広まった。ベルギーでも、国家及び共同体レベルにおいてインターカルチュラリズムが取り入れられ、2005年頃から社会統合のあり方を問う政策で度々言及されている。

インターカルチュラリズムは、移民やマイノリティとの共存関係が検討課題の軸となり発展した概念であるが、ベルギーでは同概念を、国内の言語やエスニシティをめぐる対立の歴史や、現在の分権体制をも考慮に入れて捉える必要が生じている。1970年代以降、ベルギーではオランダ語、フランス語、ドイツ語の各言語共同体で分権体制が確立されて以来、それぞれの政治事情や文化的背景をもとに対外的な文化関係を築いてきた。それは同時に、共同体間の協力は考慮の対象としないことを意味していた。しかし、インターカルチュラリズムが重視される過程で、文化政策において共同体間の協力も政策課題として取り上げられる現象が見られ、ベルギーの文化政策は分権体制の新たな時代を迎えている。

そこで、本研究ではベルギーの中でもインターカルチュラリズムを積極的に取り入れているフランドレン政府の文化政策を事例に、インターカルチュラリズムがどのように文化政策に受容されているのかを検討する。まず、2000年代以降の多文化主義、インターカルチュラリズムの議論を中心に、社会統合モデルに関する国際動向を整理した上で、ベルギーにおけるインターカルチュラリズムの導入背景や歴史的な文脈を確認する。次にフランドレン政府の文化政策における文化概念の変容過程を概観し、その中でのインターカルチュラリズムの位置づけを示す。特に本研究ではフランドレン政府が2006年に発表した「フランドレンのインターカルチュラリズム化に向けた活動指針」、及びその後発表された同計画の政策実施報告書を軸に、インターカルチュラリズムによる文化行政・市民参加の枠組みへの影響、及び事業評価への基準への導入、事業実施の状況といった計画の経過をたどる。以上をふまえ、フランドレンの文化政策における「文化」の捉え方のディスコースから、フランドレンにおけるインターカルチュラリズムの影響を考察する。

本研究を通して多言語国家ベルギーならではのインターカルチュラリズム受容の一端を明らかにし、同概念の発展可能性を示したい。

【研究発表論題と要旨】 第3会場

1. 13:30～14:00

クリント・イーストウッド西部劇に関する一考察
—『グラン・トリノ』のマイノリティー表象を中心に—

深津勇仁（慶応義塾大学大学院博士後期課程）

本報告はクリント・イーストウッド主演、監督作品である『グラン・トリノ』が西部劇作品としての要素を備えた西部劇であるとの前提に立って考察したものである。イーストウッド監督最後の現代西部劇とも言われる『グラン・トリノ』は米国で2008年に公開され、日本では2009年に上映が開始された。物語の主人公であるポーランド系アメリカ人のコワルスキー（イーストウッド）は強面な頑固者だが、妻に先立たれて近所の白人達と悪態をつく毎日を送っている。人付き合いの苦手なコワルスキーを取り巻く周辺環境は、デトロイトに押し寄せる移民達の波によって時事刻々と変化していく。町の環境の変化に戸惑いを見せるコワルスキーも隣のアジア系モン族のタオ（ビー・ヴァン）とスー（アーニー・ハー）との触れ合いを通じ、それまでの白人優位の米国社会において周縁化された移民達の実態を知り、彼らのコミュニティーに徐々に親近感を覚えるようになる。最終的に、コワルスキーはタオとスーにとって脅威となっていたモン族のギャング達の前にたった一人で丸腰で立ち向かい、無数の銃弾を浴びて絶命する。結果的に、ギャング団は殺人罪で警察に逮捕され、町には平和がおとずれる。

『グラン・トリノ』は法治国家アメリカで広がる格差社会や移民問題、銃規制に関する諸問題を余すところなく描き出した。同作品は現代が西部劇のような勸善懲惡の二分的世界ではなく、法の支配を効果的に援用することで弱者が外敵から身を守ることができるという側面をまざまざと描き出すと同時に、そのために犠牲とならざるを得なかった主人公の死という矛盾にも光をあてる。

本報告では、作品に登場する多様な人種達の特にマイノリティー表象に焦点を絞って分析を試みる。具体的には、レヴィ・ストロースの神話分析のための連立方程式(レヴィ・ストロース 1972)や A・J グレマスの考案した記号論四辺形(グレマス 1983)、並びに E・サイードの『文化と帝国主義』における帝国意識といった概念を応用して客観的な分析を試みる。

【研究発表論題と要旨】 第3会場

2. 14 : 00 ~ 14 : 30

高等学校応援団の演舞に関する研究 —伝統校の身体動作における儀礼的要因の分析—

岩崎智史（東京未来大学専任講師）

金塚基（東京未来大学准教授）

伝統的な歴史を有する日本の高等学校には、主に自分たちの学校の選手たちを応援する生徒や関係者の応援活動をリードあるいは統制する役割を担う応援団と呼ばれる組織を有する学校がある。彼らは日々の訓練によって、運動部の大会や対外試合での応援をリード・統制するのみならず、校内における体育祭などの学校行事における集団的な応援活動を代表する役割を担う。

これら学校の生徒集団の応援活動は、所属する学校における集団的同一性の維持や確認に寄与している。生徒たちが共に学校の運動部の試合を観戦して同じ学校に所属する運動部を応援することは、学校集団との一体感を著しく高め、当該学校の文化的価値や規範などを再生産あるいは創造していくような効果をもつ機会として考えることができる。日常的な学校生活を離れた場所で、活躍する選手の姿と自己を同一化して応援する活動が共通の感情を形成し、同級生との一体感を高め、学校への帰属・愛校心を高めることになる。よって、応援団の活動には重要な教育的機能が含まれるため、ここでそのような機能に関するプロセスを考察する意義が生じてくる。しかしながら、そうした視点に基づく高等学校の応援団の活動に関する先行研究はおろか、高等学校応援団をテーマとする先行研究自体がこれまでにほぼ存在していない。

そこで本報告では、まず、応援団の具体的な応援活動において最も特徴的であり、主要因である身体動作（＝演舞）について考察し、応援団の演舞の動作と日本舞踊や空手の型などとに共通する価値基準が含まれていることを踏まえつつ、演舞の身体動作の3次元的分析および映像を用いた印象評価に基づくアンケート調査の回答結果の分析から、応援団の演舞の役割・意義について考察することを目的とする。

3. 14 : 30 ~ 15 : 00

「自然共生社会」規範の伝搬に関する研究：生物多様性への取り組みを事例として

横田匡紀（東京理科大学准教授）

現代社会において環境問題は重要な問題として認識されるようになり、自然と人間社会との共生に向けた様々な試みがなされていると同時に、その実現には困難が伴っている。現代の日本において、そうした自然との共生に向けて「自然共生社会」という規範が掲げられ、様々な施策が実施されている。

本報告では、日本の生物多様性保全への取り組みの事例として、「自然共生社会」という規範がいかに普及伝搬したのか、そのプロセスを考察する。

具体的には日本の環境保全への取り組みにおいて、自然共生社会や生物多様性保全の規範はいかに位置づけられていたのかをみていく。規範とは、カツェンスタインらによれば、アクターの間で共有された行動の基準であるとされる。様々なアクターが様々な規範を追求し、それらの衝突、調整を反映したものが政策となる。その際には日本の環境政策の重要な政策文書を取りあげ、そこに現れた言説を分析する。政策文書としては6年おきに公表される環境基本計画を主として取りあげる。環境基本計画は日本の環境政策の指針となっており、その策定にあたっては企業や非政府組織(NGOs)などの各種主体の意見の聴取も行われている。環境基本計画は第4次まで策定されている。現在は、第5次環境基本計画の策定作業が行われている。

そして規範についての言説分析の際には次の点に注目する。

- 1) 環境規範：生活環境主義や人間非中心主義の視点がどの程度盛り込まれているのか。
- 2) 経済規範：経済的手段、経済活動をどのように位置づけているのか。
- 3) 社会規範：多様なアクターの参加に関してどのように扱われているのか。
- 4) 国際規範：国際的動向の影響、国際協力に関してどのように言及されているのか。

上記の規範についての区分をもとに、第5次に至る環境基本計画の政策文書において、生物多様性保全の側面に注目し、環境、経済、社会、国際の側面がどのように表出し、変化したのかを考察していく。

考察を通じて、本報告では、単に環境保全の規範だけではなく、経済規範、社会規範、国際規範が絡み合うことで、生物多様性保全の問題が複合化していく諸相を明らかにする。

【研究発表論題と要旨】 第3会場

4. 15 : 15 ~ 15 : 45

クィア・ゴシックの視点で読む *Reflections in a Golden Eye* の 映画アダプテーション『禁じられた情事の森』

岩塚さおり（名城大学非常勤講師）

Carson McCullers (カーソン・マッカラーズ) の 1941 年発表の *Reflections in a Golden Eye* (邦訳『黄金の眼に映るもの』) は、アメリカ南部陸軍の駐屯地で起こった殺人事件の物語である。本作品の登場人物 – 同性愛の Captain Penderton (ペンダートン大尉)、大尉の妻で姦通者の Leonora (レオノーラ)、レオノーラの姦通者の相手である隣家の Major Langdon (ラングドン少佐)、少佐の妻で病弱な Alison (アリソン)、アリソンに献身的に使えるフィリピン人 Anacleto (アナクレト)、覗き屋の Private Williams (ウィリアムズ一等兵) – それぞれが、何等かの身体的奇形、異なる性的嗜好、両性具有的な特徴を持ち、彼らの愛する対象者は、皆、異なる方向を向き、報われない愛情に孤独を感じて奇行に走る姿が描かれている。

この小説が発表された当時、駐屯地における将校の不倫や覗き趣味の一等兵の語りを見せたことで、未熟な女性 (マッカラーズ) の想像で創り上げた下劣な作品と、多くの読者がショックを受け、読むことを拒否した (Carr 91, 136, 535)。その 26 年後の 1967 年 10 月に『マルタの鷹』(1941 年)、『モービー・ディック』(1956 年) などを生み出した名監督 John Huston (ジョン・ヒューストン) の手によって、本作品は、映画化され公開された (邦訳では、『禁じられた情事の森』)。しかし、この時もまた、アメリカの映画協会に準ずる規定において C ランク、すなわち、C は、“Condemned by Legion of Decency” の “Condemned” を表し、品位を問う点においては、非難すべき作品というレッテルを貼られた (Carr 535)。ようやく上映が認められたものの、「成人向き」映画とされ、また、「男女の裸むき出しの状態の場面が現れ、人間の洞察力などほとんど見られない」(Carr 535) という酷評を受けた。

本発表では、物議を醸しだした小説が、映画というアダプテーションに作り変えられた後もまた、酷評されたのは、小説で語られた同性愛の物語を、ヒューストン監督の手によって「ひどく恐ろしく、言葉に出来ないもの」「おぞましきもの」として、同性愛恐怖 (ホモフォビア) を露呈させた、すなわち、クィア・ゴシックの視点を見せたからであることを明らかにする。特に、ヒューストン監督が、短調で薄気味悪さを感じさせる音楽を背景に流しながら、ペンダートン大尉のウィリアムズ一等兵に対する眼差しを映し出す場面、また、ペンダートン大尉がウィリアムズ一等兵と共に心中すると示唆される小説の最後の結末が、アダプテーションでは大幅に作り変えられている点に焦点を当てて検証していく。

引用文献

Carr, Virginia Spencer. *The Lonely Hunter: A Biography of Carson McCullers*. London: Peter Owen, 1977. Print.

5. 15 : 45 ~ 16 : 15

文章・談話のスタイルに対する、メディアを踏まえた分類試案

大谷鉄平（長崎外国語大学特任講師）

1. はじめに

語彙は何らかのメディアを通じ流通する。換言すれば、ことばが発信（＝生産）主体から受信（＝消費）主体に伝達される「場」こそがメディアであり、その様態の如何により、流通のあり方も異なってくる。本発表では、ことばの分類枠である「話し言葉」「書き言葉」「打ち言葉」に関し、メディアの特徴を踏まえた新たな基準を導入することで、より実態に即した分類枠の提出を試みる。

2. 分類枠の現状と限界

すべての言語活動は、「話し言葉」「書き言葉」「打ち言葉」¹いずれかに分類される、と考えられている。また、その基準は「伝達様式」、「スタイル」に依拠するのが一般的であり、主に文章・談話研究の分野で成果の蓄積がある。しかしながら、特に後者については、ある個別のジャンル（いわゆる「〇〇文（例：説明文、宣伝文など）」）が必ず特定のスタイルを含有するとは限らず、加えて「文章的な談話」「談話的な文章」の存在も多数指摘され、結果的に三様態は連続的な関係にある、と捉えられているのが現状である。

一方、情報通信技術の発達や国際化に伴い、言語活動の様相も多様化した。その際たる要因の一つが、メディアの多様化といえる。殊に web 環境の日常への浸透により、「打ち言葉」による言語活動が爆発的に増加した。ところが、前掲注の通り、「打ち言葉」のスタイル面での研究は進んでおらず、目下、「話し言葉」「書き言葉」の特徴を援用した考察が一般的である。したがって、「打ち言葉『独自の』特徴」の抽出・記述は現今にても課題とされている。また、「話し言葉」「書き言葉」についても、同一文章・談話内でのスタイルシフトや本来的な文法・意味から逸脱した用法など、従来は周辺的あるいは例外的とされた事象が多数確認されており、これらを説明するための概念整理もまた、喫緊の課題とされる。

3. 試論の提出

筆者は、「情報技術の革新がコミュニケーションの様態を変えた」と主張する諸先行研究での議論を踏まえ、文章・談話のスタイル面の特定のための新たな分類枠を仮定した。すなわち、①「受信（＝消費）主体の多寡」、②「（伝達・流通上の）空間的・時間的制約の度合い」を基準とした計6種の枠組みであり、発表では、具体的な実例を用い範疇化を試みた結果を提示するとともに、フロアとの議論より、問題点や改善点を抽出したい。

¹ 『デジタル大辞泉』では、「（「話し言葉」「書き言葉」に対して）携帯電話やパソコンのキーを使って（打って）書かれた語句・語法。また、その文章。メールに使われる絵文字・顔文字や「アケオメ（明けましておめでとう）」などの略語による簡略化した表現や、漢字を多用するなどの特徴があるとされる。（<http://kotobank.jp/word/>検索日:2017年2月28日）」とあるが、そのスタイル上の特徴に関する研究は、あまり進んでいないのが実態である。

【研究発表論題と要旨】第4会場

1. 13:30～14:00

初級英語学習者の文産出促進のための指導法に関する提案 —制限英作文における主語の設定を中心に—

橋尾晋平（同志社大学大学院博士後期課程）

グローバル化に伴い、文部科学省は英語教育における生徒のコミュニケーション能力の養成を重視し、大学英語教育においても、英語によるコミュニケーションに重点を置いた授業を求めようになってきた。文法能力や語彙力が不十分である大学初級英語学習者（以下、学習者という）にとって、スピーチやディベートなどの活動を英語で行うのは敷居が高いと考えられる。Hashio (2018) は、学習者に対して、制限英作文の Fill-in-the-blank のような一定のスピーチの雛形（「テンプレート」）を用意し、その雛形の空所に自分の意見を 1～2 文の英語で書きこむことで、50～100 語程度のスピーチを作成したり、英語でディベートを行ったりする指導法を提案した。

この指導法では、テンプレートの空所にいかにして正確な文を挿入するかが課題になってくる。筆者は、1 例として、インターネットの利用の是非について、英語でディベートを行う授業を行った。学習者は、母語である日本語で「インターネットはたくさんの情報が得られる。」という発想で英訳するが、解答例では、“We can get much information on the Internet.”ではなく、“The Internet can get much information.”という誤った英文が散見された。これは日本語の主題卓越的構造の転移と思われ、学習者には、正しく主語を設定できる能力を伸ばす指導を並行して行う必要がある。

学習者に対する文産出の効果的な指導法に関しては、田地野（2008）は英語の文で意味役割の順序が固定されていることを徹底的に指導する「意味順」指導法を提唱し、吉田・柳瀬（2003）は母語として使っている日本語（J1）と英語で表現するための日本語（J2）の 2 種類の日本語を利用した指導法を推奨している。

本発表では、学習者による制限英作文を利用したスピーチやディベートの授業での文産出例と上述の教授法を並行して行った際にみられた文産出例などを比較検討し、コミュニケーション活動の円滑な遂行という観点から、よりよい文産出を行うための指導法を検討する。

主要参考文献

Hashio, S. 2018. “The English Debate Instruction to Improve Production Ability among Elementary-Level Japanese EFL Learners: Proposal for “Simplified Debate.”” 『文化情報学』 13(1), (印刷中).

田地野彰. 2008. 「新しい学校文法の構築に向けて—英文作成における「意味順」指導の効果検証—」『平成 20 年度英語の授業実践計画』 pp.8-21.

吉田研作・柳瀬和明. 2003. 『日本語を活かした英語授業のすすめ』東京：大修館書店.

2. 14 : 00 ~ 14 : 30

**Is Karate Useful for Daily Life?
—A Study on Sri Lankan Karate Practitioners' Awareness**

Petra Karlova (Waseda University, A.P)

Karate has recently been attracting attention as new Olympic sport. Although previous studies argued positive effects of karate in many aspects, still there exist a mistaken belief that karate is good only for fighting. This paper aims to examine the usefulness of karate by looking at Sri Lankan karate practitioners' awareness about karate usefulness in their daily life, and to clarify the values which they find in karate. Karate activities in Sri Lanka are managed by Sri Lankan Karate-Do Federation which is member of World Karate Federation. This means that mainly sport karate with focus on competition is diffused there, and as a result Budo spirit, emphasizing the cultivation of the mind, is not transmitted as a part of karate.

The author conducted a questionnaire survey in 6 karate organizations in Sri Lanka from 6 to 17 August 2017. The questionnaire asked the practitioners 1) to circle their reasons for karate practice, 2) to answer if karate is useful for their daily life, and 3) to explain the reason for their answer. The answers of 241 practitioners were collected. 82.5% of respondents replied that karate is useful for their daily life. The reasons from the usefulness of karate may be partially deduced from their choices to the question why they practice karate. While the most frequent reason was for self-defence (71%), 48% chose "as an education to develop mental skills," 23% chose "as a sport – for health," 17% chose "as an education to develop personality," etc. These results would imply that a significant number of Sri Lankan practitioners is aware about usefulness of karate not only for fighting, but also for developing mental skills, health and personality.

This is demonstrated by the results of qualitative analysis. Many respondents claimed karate is useful for developing mental skills, such as concentration, discipline, patience, endurance, and confidence. Furthermore, some respondents also mentioned usefulness of karate for developing personality - to become polite and humble person. These results confirm the previous research conducted in Japan that karate practice can improve mental skills and personality, which is useful for daily life. Thus, Sri Lankan practitioners of sport karate can acquire values similar to Budo spirit in traditional karate in Japan.

This paper hypothesizes that it may be due to influence of Sri Lankan culture which is based on Theravada Buddhism. Sri Lankan Buddhism is characterized by focus on cultivation of the mind through discipline and meditation that leads to concentration and intuitive wisdom, and ultimately to a better human being.

3. 14 : 30 ~ 15 : 00

**How Cultures Shape Our Preferences and Values:
A Study on Young Females Living in Japan and Brazil**

Takayo Sugimoto (Aichi University Junior College, A.P)
Narumi Hashimoto (Aichi University Junior College, student)

How does the culture we live by affect and determine our preferences and our behaviors in everyday life? The present study aims to investigate some aspects of young females' clothing wearing behaviors from the acculturation perspectives (Sam & Berry, 2016)

We conducted a questionnaire survey on how young females' preferences for clothing styles. Our participants were 30 females: 10 Japanese females living in central Japan (Mean age: 20 yrs.), 10 second-generation Brazilian females living in central Japan (henceforth, Japanese-born Brazilians; Mean age: 23.1 yrs.), and 10 Brazilians who have lived in Brazil ever since they were born (henceforth, Brazilian-born Brazilians; Mean age: 20.7 yrs.).

In the survey, we asked our subjects to answer how they would wear a camisole because it is originally worn as an inner, but nowadays it has a variety of wearing styles as a part of fashion worldwide. We used drawing methods in investigating their preference for clothing styles. That is, we asked them to answer it by freely drawing and coloring a camisole on a lady figure already printed in the answer sheet. They were also asked to draw skirts, trousers, etc. to wear with a camisole.

Our results show that all the subjects preferred wearing a camisole as an outer; however, they differed in their preferred clothing styles as an outer. In particular, 90% of Brazilians living in Brazil preferred wearing it directly on their underwear while 30% of Japanese-born Brazilians and no Japanese preferred the same clothing style. Instead, 90% of Japanese females and 60% of Japanese-born Brazilians preferred wearing it on T-shirts or long-sleeves (layering style).

Interestingly, our Japanese-born Brazilian subjects have lived with their first-generation Brazilian mothers, who contrastively preferred wearing it directly on the underwear just like young Brazilians living in Brazil did. This 'directly wearing a camisole' style or the 'layering a camisole on a T-shirt' style may reflect cultural differences between Brazil and Japan. Directly wearing a camisole means that they can show more skins (shoulders, etc.) in public. It has not been encouraged to expose their body in public in the traditional, conservative Japanese culture. On the other hand, layering a camisole on a T-shirt can prevent young females from exposing their body in public.

We conclude that young Japanese-born Brazilian females have been assimilated to the Japanese female culture of rather conservative clothing styles, diverging from their mothers, who remained with their Brazilian clothing style. Some theoretical implications will be considered.

[References]

Sam, D. L. & Berry, J. W. (2016). *The Cambridge Handbook of Acculturation Psychology*. Cambridge University Press.

【研究発表論題と要旨】 第4会場

4. 15 : 15 ~ 15 : 45

日本人大学生英語学習者の発話する英語母音について

高橋栄作（高崎経済大学准教授）

2020年から英語教育が小学校で「必修化」「教科化」される。その背景には、早期教育が英語習熟度に影響を及ぼすということがある。学習開始年齢が低ければそれだけ、学習時間が長くなるのである。しかし、Ojima, et al.(2011)は、一つの基礎データではあるが、外国語の語彙学習時の脳反応は、母語にみられるものと同じであることを示した。学習期間が同じ場合、むしろ遅く学習をはじめた方が有利であるとの傾向が確認された。これによれば、英語を早期に学習しなくても語彙については学習が可能ということである。しかし、英語の音声面についてはどうであろうか。平成26年度 英語教育実施状況調査(小学校)の結果概要では、英語免許状所有者の教員総数に占める割合は5.3%だという。この状況で2020年以降、英語を専科としない小学校教員が、児童の前で発話する際に「英語らしい発話」をおこなうことができるであろうか。そこで、本研究では「どのようにすれば英語らしい発話」をすることができるのかを考察する。まず、言語類型論により日英語の相違を比較する。窪園・太田(1998)によれば、日英語は次の点で異なるという。モーラ言語と音節言語、開音節言語と閉音節言語、ピッチ・アクセントとストレス・アクセント、語ピッチ言語とイントネーション言語、音節拍リズムと強勢拍リズムの相違があるという。さらに、音素数についても異なる。川越(2007)によれば、日本語の母音は/a//i//u//e//o/ (基本母音表記で代用)であるのに対して英語は/i//u//ε//Λ//æ//i://u://ɔ://ɑ://e//ɔ//a//au//ou//ə/と母音の数が豊富である。そこで、英語学習者はこれらの相違に注目して、英語らしい発話を身につければ良いことになる。ところで「英語らしさ(intelligibility)」についての研究で非常に興味深いものがある。Kashiwagi and Snyder (2010)では、日本人大学生の音読をアメリカ人と日本人がそれぞれ評価した。その評価のなかで、アメリカ人評定者は「母音」に注目したという。上述したように、日英語では母音の数が大幅に異なる。母音を弁別する際に、母音の特徴を表す第1フォルマント(F_1)が用いられる。フォルマントとは、音のエネルギーの集中帯である。母音が豊富な英語話者の発話する母音ではそれぞれ F_1 が異なることになる。また、杉藤(1996)はアクセントの置かれた母音では F_1 ・ F_3 が大きく異なり母音の持続時間が長いという。以上から、日本人の英語発話の特徴として次のようにまとめられる。1. 英語の母音を日本語の母音に包含してしまうため、音素が異なっても第1フォルマントが同じである。2. F_1 ・ F_3 がほぼ同じである。裏をかえせば、これらを示さなければ英語母語話者の発話に、近接した発話といえる。そこで、本考察では日本人大学生英語学習者の発話をアムステルダム大学の Paul Boersma と David Weeink が開発した音声分析ソフト Praat を用いて分析する。日本人大学生英語学習者の発話する母音を分析し F_1 が異なるのかを考察する。また、 F_1 ・ F_3 の差が大きく異なるのか、母音の持続時間が長くなるのか併せて考察する。

【研究発表論題と要旨】第4会場

5. 15 : 45 ~ 16 : 15

体育会系学生への英語指導改善への道筋 —アメリカ大学における体育会系学生教育との比較を通して—

細江哲志（横浜商科大学准教授）

白須洋子（横浜商科大学兼任講師）

東本裕子（横浜商科大学准教授）

清水スタンボーグ恵子（横浜商科大学特任准教授）

発表者及び筆者は、横浜商科大学の必修英会話の授業において学生主体の授業学習効果の向上を目指すため、ルーブリックを作成し、学生同士お互いに評価しあう授業を試みている。その結果、体育会学生と非体育会学生の間に、英語学習に対する他者への評価傾向や英語に対する自己肯定感において差異が見られることが分かった。

ルーブリックを用いた授業の内容として、1年次学生2年次学生から成る7クラスで合同授業を開催し、各クラスから選出した1名のスピーカーが朗読と質疑応答を披露し、それを他の学生がルーブリックを用いて評価した。ルーブリック評価にはグーグルフォームを用いて学生の利便性をあげ、学生の目指すべき具体的ポイントを明確化し、学生が積極的かつ主体的に授業に参加することを狙った。従来、本校では体育会学生クラスにおいて、英語力や学習意欲の点でやや劣るといった問題点があった。そこで、ルーブリックの評価データを体育会系学生と非体育会系学生に分け、統計的に分析すると、両者の間に特徴的な差異が見られた。

一方発表者は、体育会系学生への教育支援という点に注目し、アメリカの大学における体育会系学生への教育支援についての論文との比較を試みた。（長倉富貴“学生アスリートの学習支援について～山梨学院大学とアメリカの大学の事例～”山梨学院大学経営情報学論集17,2011.2.9）アメリカには1983年に大学の枠を超えた組織としてNational Collegiate Athletic Association（全米大学体育協会、略称NCAA）がある。アスリートの学業とスポーツの両立のため様々な課題が議論され学生支援の方法が提示されている。またAcademic Progress Rate（APR）という評価システムにより体育会系学生の学業と運動の両立が厳しく求められている。アメリカとの比較をもとに、本校における体育会系学生への指導の課題と問題点を再検証し、また、野球部学生へのインタビューを実施して学生の傾向を分析した。

また、今後の課題としてルーブリックの精度をあげ、体育会学生と非体育会学生との指導方法のポイントの差異を明確化する作業とともに、近隣大学や本校の提携校であるピッツバーグ大学における体育会系学生への教育支援についての聞き取り調査の実施を計画している。Keywords: ルーブリック、体育会系学生、NCAA

【研究発表論題と要旨】第5会場

1. 13:30～14:00

漢字についての認知的日中文化対照研究

—植物に関する漢字を中心に—

段静宜（関西外国語大学大学院博士後期課程）

中国の漢字は音声、字形、意味を組み合わせることで、中国語を記録するための視覚符号となる。最古の象形文字から、漢字は中国人が天地万物に対する認知を直接反映することができる。身の回りの事物を絵のように記録して、漢字は意味を持つことになる。

人間の理解が深く進むこととともに、漢字も変わっていく、漢字が持つ意味も拡張され、中国語は生命力を保つことができる。漢字は日本に伝わって以来、日本文化の影響を受け、日本語の一部として取り入れられ、新たな形や意味を生み出みだした。

自然界の重要な一部である植物は、人間の生産生活と密接な関係がある。食料品の材料、薬品、建築の原材料、生産道具などとして使われてきた。生活が豊かになるとともに、植物は観賞、装飾の役割を持つようになり、美術的、芸術的領域に幅広く応用されるようになってきた。植物の文化史は、人類の文化史とお互いに融合することができるといえる。

このような視点から、本稿ではまず、植物と人間の関係性を遡り、植物に関する漢字を考察することで、人間は如何にして認知プロセスを介し、植物を捉えるのかを明らかにしたい。

また、認知言語学の視点から、植物に関する漢字を考察対象とし、漢字の構造における認知メカニズムを分析する。そして、漢字が持つ意味について、どのような認知プロセスを介して意味拡張を行うのか考察していく。植物に関する漢字の考察を通して、日中両言語における漢字への意味解釈、使用状況の一致と相違を見出だし、日中両国は植物に関する文化の繋がりを明らかにしたい。

参考文献

- 深津正（1989）『植物和名の語源』八坂書房
寺井泰明(2000)『花と木の漢字学』大修館書店
山梨正明(2000)『認知言語学原理』くろしお出版
齋藤正二(2002)『植物と日本文化』八坂書房
加納喜光(2008)『植物の漢字語源辞典』東京堂出版

【研究発表論題と要旨】第5会場

2. 14:00～14:30

広東語と日本語の比較の試み

周聖來（アーキヴォイス横浜校・スクール長）

広東語は「白話」、「粵語」とも言い、古くは「広府話」とも称せられた。発音と語彙において中国語の標準語である「普通話」と大きな差があるので、本稿では広東語と日本語の発音と語彙表現を対象を当て考察を行った。広東語と日本語の中に継承された古代漢語について、発音において、古代漢語の発音法を継承する中、語の基本義用法においても古代漢語の意味を継承しながらも、派生義ではそれぞれ独自の用法を形成している。また、広東語における外来語の浸透は日本語に遠く及ばないが、中国標準語よりは外来語がたくさん用いられている。

本稿はまず広東語の入声と日本語の促音について考察した。現代以来、「お弁当、豚骨」等の食文化を表わす語彙を中心に広東語に広く浸透している。そのほか、「暴走」、「少子化」、「人気」など、和製漢語は様々な範囲で特に香港及びマカオに浸透している。一方、中国は昔から「食は広州にあり」というように、広東語には数多くの地方の食文化を反映する表現がある。「飲早茶／飲茶、叉焼／チャーシュー、云吞／ワンタン、焼売／シューマイ、蛋挞／タルト、大排档／露店の飲食店街、老火靚汤／煮込みスープ」等はその例として挙げられる。日本人も「飲茶・ヤムチャ、叉焼・チャーシュー、焼売・シューマイ、雲吞・饅頭・ワンタン、點心・テンシン」等の言葉を日本語の中に取り入れている。広東料理の影響の大きさを物語っている。そのため、広東語語彙と日本語語彙について考察を行った。

3. 14 : 30 ~ 15 : 00

発表辞退

【研究発表論題と要旨】第5会場

4. 15 : 15 ~ 15 : 45

メタファーによる説得力に関する一考察

—日中公共広告表現の比較を通して—

黄琬詒（同志社大学大学院博士前期課程）

日本では、昔よりもマナーが悪い人が増えたと感じている人は7割を超えている一方で、中国でも、公共の場所で禁煙できない人がまだ多く見られるなど、社会問題化している。この現状を改善するために、公共広告表現では、人々に良いマナーとは何かを知ってもらい、それを行動に移すように勧めている。

本発表では、関連性理論に基づいて、日中公共広告の日中比較を行う。李（2010）は、言語表現と言語修辞から、日中公共広告を比較分析して、日中公共広告表現の特徴をまとめた。品詞の使用頻度から、日中の広告表現は主に名詞を中心としている。また、日本の広告表現は簡潔に伝える特徴がある一方、中国の広告表現は広告に関する情報量を多く伝える傾向がある。さらに、日本の広告表現は、漢字、ひらがな、カタカナ、ローマ字が混用されるのに対して、中国の広告表現は、基本的に漢字のみである。修辞については、対句、比喩、反復、倒置法、省略法などの方法が用いられ、日本の広告表現は、感情描写を重視して、倒置法の用法が多い。中国の広告表現は、主張を重視して、対句の用法が多く、言語形式美を重視している。

徐・清水（2011）は、日中公共広告の印象を測定して、日本の広告の「表現抑制性」は「エンターテインメント性」から工夫を凝らした表現によるものである一方、中国の広告表現は公共問題の理解と問題解決を目的とする印象が強いと指摘した。効果分析では、日本の「街のコレストロール」というメタファーを含むキャッチコピーは、中国の調査協力者にとって意識変化の効果が強いので、このような人々の予想を呼び出せる表現への転換が望まれると指摘した。

さらに、関連性理論における表意については、Carston（2000）が、一義化、飽和、自由拡充、アドホック概念形成の4つの語用論的プロセスが存在すると指摘した。Carston（2002）は、関連性理論において、メタファーは聞き手が表意を復元する際の語用論的拡充の一つである「アドホック概念の構築」によって復元する意味であると説明している。これらの研究背景と先行研究を踏まえ、本発表では、①メタファーあり、つまり、表意の中のアドホック概念形成（直喩に転化できるもの）を含むものと②メタファーなしというそれぞれの表現形式を含む日中公共広告表現を研究対象として、日中の公共広告の印象分析と効果分析を通して、両言語に見られる印象構造と効果の違いを検討する。

研究方法については、SD法などの方法を使って考察を行う。まず、メタファーあり・なしについて予備調査を行う。次に、本調査で、日本語と中国語による公共広告において、両者の印象構造と効果の違いを求め、メタファーの有無による広告の説得力の違いが見られるかを明らかにする。

主要参考文献

Carston, R. 2000. "Explicature and Semantics," UCL Working Papers in Linguistics 12, pp. 1-44.

Carston, R. 2002. *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*. Oxford: Blackwell. (内田聖二・西山佑司・武内道子・山崎英一・松井智子訳. 2008. 『思考と発話—明示的伝達の語用論』東京：研究社.)

李佩錫. 2010. 「浅析中日公益广告词的特征」『长春理工大学学报』第5卷第11期, pp.79-91.

徐小安・清水由美子. 2011. 「日本と中国の公共広告研究 - 技法、修辞、効果に関する比較と分析 - 」『情報メディアセンタージャーナル』第12号, pp.79-91.

【研究発表論題と要旨】第5会場

5. 15 : 45 ~ 16 : 15

疎開学寮教師の心情—北京日本人学校教師小川一朗のその後、未刊歌集の紹介を中心に—

向野正弘（向野堅一記念館館長・埼玉県立所沢西高校教諭）

小川一朗は、大東亜戦争（アメリカの呼称に従って太平洋戦争ということが多い）の時期に四種の未刊歌集を執筆している。この歌集は、一人の青年教師の「自分探しの旅」とでもいえる足跡に沿って記されたもので、北京の日本人学校「大陸（たいりく）」→疎开学寮「龍膽^{りんだう}」→徴兵「征野^{せいや}」→帰郷「桃里^{たうり}」と書き継がれる。この中で「征野」は、短期で終戦を迎え、その中に納められるはずであった戦陣歌も軍の指示によって焼却されてしまっている。それでも、トータルとして見ると、当時の日本人の心情を伝える貴重な史料といえると思う。

報告者は、関東支部例会（於東京未来大学、2018.3.10）において、「戦中期在北京日本人学校教師小川一朗の未刊歌集『大陸（たいりく）』について—紹介を中心として—」と題して、口頭報告する予定である。その際には、心情史アプローチのあるべき手法を模索して、アイデンティティの概念を援用して分析枠組みとする心づもりである。ただこの枠組みは、疎开学寮の教師としての心情を分析する枠組みとしては、無理のある枠組みのように感じられる。そこで、つぎのように考えて検討を加えることとする。

小川一朗は、疎开学寮において、教育のあるべき姿を自覚的に模索した教師であり、「寮錬成」という未刊の原稿を残している。その概要は「小川一朗稿「寮錬成」の基礎的考察—東京市戸塚第一国民学校草津学園における実践的学寮教育論—」（『比較文化史研究』17、2016.3）としてまとめている。本報告では、疎开学寮教師としての児童、生活、教育等に関する心情を中心に検討を加え、諸賢の御批判を賜ることとしたい。

【研究発表論題と要旨】第6会場

1. 13:30～14:00

韓国の大学における日本語学習者の日本及び日本人のイメージ －日本語・日本関連専攻者と非専攻者の比較－

金元正（九州大学大学院博士後期課程）

近年、韓国における韓国人日本語学習者や日本語・日本関連専攻者（以下、専攻者）、日本への留学者などが非常に減少している。韓国・朝鮮の留学生総数は2010年に比べ2016年には4割以上の減少が起きており、韓国人日本語学習者の数は7割以上激減している。加賀美他（2014）、金（2016）は韓国人日本語学習者を対象とし、対日イメージについて調査を行った結果、2011年3月11日の東日本大震災以降、特に「地震・放射能などの安全問題」について日本が抱える事態の深刻さを指摘している。

以上のことを踏まえ、本稿では韓国の大学における日本語学習者（専攻者と非専攻者）の日本及び日本人のイメージやそのイメージの変化、影響要因、日本語学習開始への影響などを明らかにし、その2つの群を比較検討することを目的とする。

本稿では韓国の大学（2校）において、日本語学習者135名（専攻者79名、非専攻者56名）を対象とし調査を行った。因子分析やカイ2乗検定を行った結果、日本のイメージについてはそれぞれ5つの因子が抽出された。専攻者の場合は「偏見や差別」、「環境の良さ」、「災害への不安」、「個性重視」、「信頼できる」という因子であり、非専攻者は「社会環境の良さ」、「信頼できる」、「自然環境の良さ」、「個性重視」、「偏見や差別」という因子が抽出された。日本人のイメージについてはそれぞれ4因子で「冷たさ」、「二面的」、「配慮的」、「興味・関心」が抽出されたが、非専攻者では専攻者の結果と異なった「消極的」という因子が抽出された。そのイメージの影響要因についてカイ2乗検定を行った結果を見ると、「日本人との交流の経験」や「日本で生活した経験」などに対しては専攻者の方が、「日本に詳しい親戚や友人の話」や「韓国の小説、ドラマ、映画」などに対しては非専攻者の方が非常に高く見られた。また、日本語学習前後の対日イメージの変化については「ただの言語学習、日本語学習でイメージは変わらない」などの「変化してない」が最も高かった。日本語学習開始への影響については「成績に合わせて入学、日本人との接触機会が少ないため影響してない」などの「影響を与えてない」が最も高く見られた。そして、近年韓国人日本語学習者や専攻者などの減少要因については、専攻者と非専攻者両方とも「地震・放射能の問題」、「日本語のメリット減少」、「中国語の影響」が最も高く示された。

以上のことから、近年では日本語をただの言語学習や大学入学のために日本語学習を始める場合が多く、昔に比べ対日イメージが日本語学習開始や専攻選択時に大きな影響を与えていないと示唆される。また、専攻者より非専攻者の場合は将来のことに不安で専攻として選択しないという理由もあると見られる。そして、韓国人日本語学習者や専攻者などの減少要因の中で、特に「日本語学習や日本語・日本関連専攻のメリットの減少」は、非常に深刻な問題として捉えるべきであると考えられる。

【研究発表論題と要旨】第6会場

2. 14:00～14:30

韓国と日本における「多文化の子ども」への教育支援に関する考察

申芸花（九州大学大学院博士後期課程）

I 研究の背景と目的

韓国と日本は外国人居住者数が年々増加している。その背景としては、一つは、韓国と日本は労働力を受け入れたのが大きな割合を占めている。経済発展のため、特に製造業での人手不足が深刻となり、労働者の賃金が少ない製造業を始め 3K 業種を避ける職場に外国人労働者を活用している。もう一つは、両国とも国際結婚の原因でもある。しかし、韓国と日本は多文化社会への推進背景が異なり、それに対する対策もそれぞれ大きく違いがある。

本研究の目的は韓国と日本が多文化社会に至ったそれぞれの背景と現状を踏まえ、それに対する両国の政策の展開をみることである。内容としては、「多文化の子ども」への教育を受ける権利の保障について、両国の法律を比較してみる。そして、両国政府はそれに対する政策がどうなっているのかを考察する。両国の類似点や相違点を考察することによって、韓国と日本の「多文化の子ども」への教育支援における問題点を明らかにする。

II 多文化社会に至った背景と政策の展開

III 「多文化の子ども」への教育を受ける権利

IV 「多文化の子ども」に対する教育支援

V 考察

韓国の「多文化家族支援法」では、「国際結婚家族」が主な対象であることを指摘している。外国人労働者家庭、その他に留学生や脱北移民者の家庭の子どもの教育に関しても支援がなされていることが伺える。日本は韓国と同じように、相当数の結婚移民者が居住しているにもかかわらず、国際結婚家庭の子どもに対しては日本人として扱われてしまうことで、外国人児童生徒のように日本語指導の機会に恵まれない。韓国と日本は「多文化の子ども」への教育に関して、政府の持続的な支援や法律づくりは不可欠であった。

【参考資料】

- ・田巻松雄（2014）『地域のグローバル化にどのように向き合うか：外国人児童生徒教育問題を中心に』下野新聞社。
- ・川村千鶴子（2014）『多文化社会の教育課題：学びの多様性と学習権の保障』明石書店。
- ・宮崎幸江編；坂本光代（2014）『日本に住む多文化の子どもと教育：ことばと文化のはざままで生きる』上智大学出版。
- ・松尾知明（2013）『多文化教育がわかる事典：ありのままに生きられる社会をめざして』明石書店。
- ・李姫姫（2010）「韓国の『多文化社会』化についての一考察」『千葉商大紀要』、48号・1。
- ・『多文化教育為の教師マニュアル』（2009）釜山広域市教育庁。
- ・チエイル、その他（2010）『多文化教育の理論と実際』ハクジサ

【研究発表論題と要旨】第6会場

3. 14 : 30 ~ 15 : 00

在朝鮮日本人の映画活動に関する研究 —1910年代の京城を中心に—

朴起範（関西大学大学院博士後期課程）

日本の植民地時期であった1910年代の朝鮮社会は、在朝鮮日本人と朝鮮人(韓国人)に分かれる二重的な構造を表した。日露戦争における勝利で日本の朝鮮に対する支配力は強化し、朝鮮に移住してきた日本人の数は急激に増加しつつあった。在朝鮮日本人が増えることで朝鮮の首都であった京城は日本人が居留していた南村と朝鮮人が居住していた北村に区分される二重的な構造の都市になった。

このような朝鮮社会の二重的な構造は映画産業にもそのまま反映された。日本による開港が行われた後、朝鮮の大都市と開港地を中心に近代の文物が流入され始めた。伝統的に、演劇というのは屋外の開かれた空間で行われていた朝鮮においても劇場の設立とともに興行業は産業に発展し、その際建たれた室内劇場は観客の誕生と大衆文化の形成をもたらした。

常設映画館が登場して映画の興行が本格的に行われていた1910年代の京城の劇場は、弁士が使う言語により日本人専用の劇場と朝鮮人専用の劇場に二分された。朝鮮へと移住してくる日本人の数が増えることで京城の日本人専用の常設映画館も拡張し、これは映画館で上映される興行物、つまり映画にも影響を及ぼした。日本で作られた数多い映画は京城の常設映画館で上映され、常設映画館を中心に形成していった朝鮮映画産業も在朝鮮日本人を中心に再編成されていった。

このように、植民地時期における朝鮮映画産業は在朝鮮日本人の影響力が至大であったにも関わらず、今までの朝鮮映画史研究において在朝鮮日本人の映画活動は排除されたまま、朝鮮人の活動のみを中心に記述されてきた。朝鮮映画史の代表的な研究者である李英一^{イヨンイル}、趙熙文^{チョヒモン}などの研究を見ると、映画の渡来から朝鮮映画の誕生までの発展過程を、映画流入—興行産業への発展—映画制作の始まりという単純な側面から朝鮮人の映画活動を中心に分析する。これはその後の研究者においても類似な形で踏襲されており、その傾向は近年の研究にまで至っている。

しかしこのような朝鮮人中心の既存の研究においては、朝鮮における映画制作がなぜ近隣国家より20年近くも遅れたのか、そして映画の輸入、配給、興行を掌握していた在朝鮮日本人たちすらも映画を制作しようとしなかったのかに対して、朝鮮の映画産業の構造的な問題を明確に説明できていない。したがって本研究では朝鮮映画産業に対する在朝鮮日本人の活動と日本映画産業の影響力を中心にした実証的な資料の考証と分析を通じ、初期映画時期の朝鮮人が観客としてのみ存在していた理由を把握しようとする。

そのために、本発表では朝鮮の映画産業がいかに構造化していったのかを、植民地時期の朝鮮の映画産業において主導的な役割を果たした在朝鮮日本人たちの活動を中心に考察する。とくに、1910年代京城において朝鮮映画産業を主導した在朝鮮日本人の劇場主、興行師を中心に当時彼らの現況と役割を考察する。それを通じて常設映画館を中心に形成された朝鮮の映画産業がいかに在朝鮮日本人により再構造化し、その結果朝鮮人の映画活動にいかなる影響を及ぼしたのかを把握する。

4. 15 : 15 ~ 15 : 45

複合動詞から見た日本文化

李暉洙（韓国放送大学教授：韓国）

日本語の複合動詞は動詞と動詞の結合であり、言語研究において取り扱うカテゴリーは文法と語彙から検討されてきた。いままでの研究では文化の面から取り扱った研究はあまり見当たらない。動詞と動詞の結合表現は他の言語ではあまり見られない。しかし、日本語と韓国語にはよく見られる。よって両言語の特徴を中心に言語類型論や対照研究など研究も文法や語彙の側面からも可能である。これらの研究と違って文化の面からの考えてみる。複合動詞と文化との接点はあまりないのではないかと思うが、複合動詞には言語文化の一面が含まれている。日本の伝統的なスポーツである相撲には複合名詞や複合動詞などが多く含まれているのも伝統文化の一面である。複合動詞の理解無しに相撲の技を楽しむことができないと思う。相撲に見られる複合動詞の技の一部を紹介すると「浴びせ倒す、居反る、送り掛ける、送り倒す、送り出す、吊り落とす、送り投げる、送り引き落とす、押し倒す、押し出す、掛け反る、掛け投げる、切り返す、すくい投げる、つかみ投げる、突き落とす、突き倒す、突き出す、吊り落とす、吊り出す、引き落とす、引っ掛ける、踏み出す、まき落とす、寄り切る、寄り倒す、渡し込む、割り出す」などである。動詞と動詞の結合表現は多くの言語では見られない独特の現象であるが、他の言語である中国語や印欧語やラテン語やギリシャ語や英語などは動詞の後ろや前にあれこれ付けられる。日本語の「動詞」と「動詞」の結合という複合動詞は多様で豊かな表現を表し、複合動詞の位相を見ることができ、日本語の言語文化を表すものも存在しており、「複合動詞」には人間関係や社会的無言の約束のような文化の側面が存在しているのである。その多義性から深層の言語文化までを表現しうるのが複合動詞である。「見合わせる」の辞書的な意味は「互いに見あう」「くらべて見る」「実行するのをやめて、しばらく様子を見る」であるが、実際には「しばらく様子を見る」という意味ではないことがある。論文の掲載の場合は「しばらく様子を見る」のではなく、端的に言えば「様子を見ず実行しない」「掲載しない」という意味である。直接的に表現せず「見合わせる」という表現を使うことによりやわらかく断ることを意図しており、相手を配慮した迂回的な表現である。列車などの運行の場合も「運行する」か「運行しない」かを判断しがたいこともある。「見合わせる」は運行を中止するかどうかをふくめて状況推移に合わせて判断を保留するという意味であり、状況によって意味内容が変わってくる。外国人りは「見合わせる」という表現を聞くと、まもなく運行が再開されると思うかもしれない。また、「思い切る」は「断念する」という意味であるが、「た」「て」「マス形」の形により働きや意味用法が異なる。「思い切った」「思い切って」「思い切り」は形により異なる場合である。また、「つける」の本動詞と複合動詞、同じ前項動詞「引き返す」「引き戻す」の働き、多義の複合動詞「引き上げる」や「乗りつける」、「買う」と「売る」に「つける」の結合、「かけつける」は「てくる」か「てくれた」が可能であるが、「て行く」との結びつかないなど。以上、複合動詞はそれぞれ一つの動作のイメージを作りあげることができる。複合動詞には、多様な意味用法もあるが、日本の言語文化の面があると言える。

5. 15 : 45 ~ 16 : 15

「断り」における冒頭発話の意味公式分析 —日本語母語話者とインドネシア人スダ語母語話者の比較—

ノフィア・ハヤティ（金沢大学院生）

異なる文化的背景を持つ人々同士のコミュニケーションでは誤解が生じることがある。そのような誤解は多くの場合、言語ごとの好まれる言い方の違いに基づいている可能性がある。言語ごとの好まれる言い方は、例えば、断り発話にも現れることがある。本研究では、そのような好まれる言い方を冒頭発話に出現しやすい意味情報という観点から明らかにする。

多くの断り研究は Beebe et al. (1997) の意味公式を援用しているが、「直接的断り」「間接的断り」「付随表現」という3つの上位カテゴリーに従う分類ではなく、下位分類に着目した研究の方がほとんどである。また 先行研究の中で日本語母語話者 (JNS) とインドネシア人スダ語母語話者 (SNS) に関する断り対照研究は見当たらない。そこで、本研究で先行研究の成果を踏まえた上で、1) Beebe et al. (1997) の上位カテゴリーでは JNS と SNS の冒頭発話の意味公式において、どのような差異が見られるのか、また 2) 冒頭発話の意味公式の内容において、それぞれどのような特徴があるのかを明らかにする。

調査及び分析は、JNS と SNS の同性同士の大学生それぞれ 30 組のペアを対象に、オープンロールプレイ方法を用いてデータを収集し、文字化することによって行った。

分析の結果、1) 冒頭発話の意味公式に関して、両母語話者は共に「付随表現」の使用が最も多いことが分かった。両母語話者は同じく相手のフェイスを脅かす可能性のある「直接的断り」を使用せず、「付随表現」を用いることにより摩擦を避けているようだ。また、「間接的断り」の使用において SNS は JNS より有意に多いことが分かった。

2) 「付随表現」の意味公式の内容に関しては、JNS は【ためらい】を、SNS は【困惑】をそれぞれの典型的に用いている。【ためらい】は任 (2002) によると、ある発話の前置きとして使われる何らかの意味を持つ発話に「あー」「うんー」などをフィラーとして日本人が多用しており、話の展開をゆったりさせ、実際的な断り発話を緩和する効果を持つという。ところが、本調査では【ためらい】を冒頭部で発話することにより、自分の断りの予告をし、その後、【理由】などで相手の意に添えないことを表明することが確認できた。これは【ためらい】を戦略に使い、言いにくいことや断りの衝撃を緩和させ、相手の依頼が受諾できないこと示唆していることになる。他方、SNS が特徴的に使用した【困惑】という「付随表現」は話者自身が困っているという気持ちを表す。Kumahanya (「どうしよう」) や Aduh という間投詞を使用することにより、相手に自分が依頼を受けるのが難しいことを相手に察してもらいたいことを示唆していると言える。「間接的断り」の意味公式【理由】の内容に関しては、なぜ相手の依頼を受諾できないのかその事情を説明し、断るのは自分の意思ではなく、外的な事情があるため、依頼を受諾するのが不可能であることを表明する。つまり、【理由】を用いることによって責任を状況に転嫁し、断り発話の直接性を軽減し、フェイスを脅かすことも緩和しようとしていることになる。今回の分析は「断り」における冒頭発話の意味公式に見られる上位カテゴリーとそこで用いられる意味公式の内容を明らかにした。「断り」における冒頭発話に後続する意味公式の出現パターンをカテゴリー・意味公式の内容から分析することが今後の課題となる。

参考文献：(1) 任炫樹 (2002) 「日韓断り発話における初出あいづちマーカー」『ことばの科学』15, 37-63. (2) 藤原智恵美 (2003) 「日本語母語話者とインドネシア語母語話者の「断り」に関する分析」大阪大学大学院言語文化専攻博士論文. (3) 吉田好美 (2015) 「勧誘に対する断り研究：日本語母語話者とマナド語母語話者」お茶の水女子大学大学院人文化創成科学研究科博士論文 (4) Beebe, L., Takahashi, T., & Uliss-Weltz, R. (1990). Pragmatic Transfer in ESL Refusals. In R. Scarcella, E. Andersen, & S. Krashen (eds.), *Developing Communicative Competence in a Second Language*. New York: Newbury House, 55-73.

【研究発表論題と要旨】第7会場

1. 13:30～14:00

準正課教育における防災教育の実践－社会的汎用能力の養成の観点から

藤巻晃（徳島文理大学地域連携センター係長）

桃井克将（徳島文理大学保健福祉学部講師）

多田一子（徳島文理大学教務部事務主任）

藤本正己（徳島文理大学教務部事務職員）

近年の教育課程改革において、学生の主体的な学びを促す施策として、正課教育以外の充実が求められている。例えば、大学設置基準 42 条 2 では「学生が卒業後自らの資質を向上させ、社会的・職業的自立を図るために、必要な能力を（中略）厚生補導を通じて培う（省略）」ことや、平成 12 年文部省「大学における学生生活の充実方策について（報告）－学生の立場に立った大学づくりを目指して－（通称：廣中レポート）」では、学生の自主的な活動を支援し、正課外教育を積極的に見直す必要性が指摘されている。

一方で、徳島文理大学では、平成 23 年の東日本大震災を教訓に、平成 24 年度より防災教育を全学的に取り組むようになった。具体的には、外部講師を招いての講演会やシンポジウムの実施である。防災という全学的な課題であるにもかかわらず、こうした取り組みは一時的に関心を高める効果はあっても、学生の継続的な取り組みには発展しなかった。

こうしたことから徳島文理大学では、平成 28 年度から社会的・職業的自立を図るために必要な能力（社会的汎用能力）の育成を目的として、防災をテーマとした準正課教育プログラム「BUNRI 防災ネットワークプロジェクト」を行っている。今回は、学生の主体的な取り組みについて支援することで見えてきた課題について考察する。

考察にあたり、平成 28 年度及び 29 年度の活動実績報告と、PROG テストの結果を分析する。さらに、平成 29 年度の社会人基礎力育成グランプリ出場とプログレスシート結果について報告する。また、受講者アンケートの結果から伺える、本プログラムの評価についても検討する。以上の報告と分析から、学生の主体的な取り組みについて、大学全体として支援することによる効果と課題を明らかにし、今後、学生の継続的な取り組みとして発展させるための提案を行う。

【研究発表論題と要旨】 第7会場

2. 14 : 00 ~ 14 : 30

日本語教科書から学ぶ防災対策 —日本語学習者が学ぶ日本語と防災—

公文素子（高知大学非常勤講師）

京都府国際センターが実施した調査によると、地震に対して「とても不安」「やや不安」と感じている在留外国人は全体の58%と半数以上が不安を抱えていることがわかった。しかし、実際防災対策を行っている在留外国人は45.2%と半数を切り、留学生に関しては35.8%であった。また、防災訓練や防災講習会に参加している在留外国人は34.5%、留学生は41.6%であった。

本発表では、不安を抱えながらも防災対策が十分に行われず、防災に対する意識が低い外国人留学生に焦点を当て、防災に特化した訓練・講習会ではなく「日本語を学びながら防災について知る・学ぶ」ことができる、日本語教科書に注目する。

災害時、「対応」の具体例：

- ・ 火事や地震の場合は、絶対にエレベーターを使わないでください。
- ・ 地震で電車が止まった場合は、無理に帰らないで、会社に泊まってください。

ここでは、日本語文法「～場合は」を導入する際に、災害時の「対応」について提示されている。また、「非常袋を準備しておかないと」というテーマで防災に関する会話文が提示されているものや地震発生を知らせるニュースをテーマにした読解文が、いずれも初級レベル（日本語能力試験 N4・N3 レベル）の教科書に提示されている。これは、防災日本語の「やさしい日本語（日本能力試験 N3 レベル）」とも共通し、初級レベルで防災に関する知識を身に付けられれば、災害発生時に外国人防災リーダーとしての役割を担うこともできると考えられる。

災害・防災をテーマに扱った日本語教科書を調査・分析・考察を行うことで、今後の外国人防災対策に役立てるものとする。

参考文献・資料：

- ・ 鶴尾能子・石沢弘子 監修 2016 『みんなの日本語 初級Ⅱ 第2版 本冊』 p.35、162 東京：スリーエーネットワーク
- ・ 日本語教育教材開発委員会 編著 2006 『学ぼう！にほんご 初中級』 p.52～53 東京：専門教育出版
- ・ 公益財団法人 京都国際センター 2013.10 「京都府外国人住民に向けた防災についてのアンケート調査報告書」

【研究発表論題と要旨】 第7会場

3. 14 : 30 ~ 15 : 00

多文化「共創」社会に求められる人材 — 不動産業界の留学生活用事例についての一考察 —

郭潔蓉（東京未来大学教授）

日本における外国人居住者は、総人口のわずか1.8%（2016年6月現在）に過ぎない。G7等の諸外国と比較をすると非常に小さな数字であるが、この数字は日本社会史上で見ると、これまでに無い大きな割合である。外国人集住地区では、外国人居住者の増加により市場や業界によっても求められる人材が変化している。しかし、事業の現場ではグローバル人材の獲得に苦慮しており、留学生の活用に期待が集まっている。

留学生の活用に関しては、日本政府も大きな期待を寄せている。政府が「留学生30万人計画」を発表したのは2008年のこと、時の総理大臣福田康夫氏が第169回国会の施政方針演説において留学生誘致構想を打ち出したことに始まる。留学生誘致キャンペーンが始まってからの約10年間、2008年の「リーマンショック」と2011年の「東日本大震災」という予期せぬ出来事に見舞われながらも、その数を順調に伸ばしてきた。

JASSOの調査によると、留学生総数のうち約71.5%の17万1,122人が高等教育機関に在籍をしている。各学種課程を修了して卒業をする留学生の総数は、直近の数字で42,643名おり、中で最も卒業生が多いのが4年制大学12,523名である。そのうちの約48.2%が就職をしており、卒業後に就職をする割合は8学種のうち最も高いという調査結果が出ている。しかし、大変残念なのは、この48.2%の進路先が全て日本ではないという点である。内訳をみると、就職先を日本と選択をしたのは39.7%で、出身国へ帰国して就職をする割合が8.2%、日本でも出身国でもない第三国へ就職をする割合が0.3%となっている。日本で育てた高度人材が海外へ流出してしまうのは非常に不本意なことではないだろうか。

一方で、多文化化する日本社会において、顧客のニーズは日々変化している。特に不動産賃貸業の現場では、顧客の多国籍化に伴い、グローバル人材の必要性が急速に高まっている。不動産業界では、こうした時代の変化に対応し、留学生の活用を積極的に行っている。特に2010年より導入された留学生インターンシップ制度は業界に新たな人材活用の可能性を供している。

因って、本研究では不動産業界における留学生の活用事例として「JMP留学生インターンシップ」の実例を研究し、その有効性と課題を考察することを目的とする。また、本研究を通して、多文化化する日本社会における留学生の活用の実効性を再認識する契機としたい。

【研究発表論題と要旨】 第7会場

4. 15 : 15 ~ 15 : 45

地域文化の振興と消費活性化を目指して —新たな魅力発信に向けた取り組み—

関口英里（同志社女子大学教授）

近年、大都市近郊の市町村では財政難や働き手不足といった諸問題を抱え、地域産業および文化振興への対策が急務となっている。本学科キャンパスが立地する京田辺市では、商業、農業、工業、観光の4分野において、包括的な産業振興策を策定し、魅力的なまちづくりと活性化を目指している。そこでは行政のみならず、市民や各産業の事業者、大学等の関連機関がビジョンを共有することが重要な行動指針とされている。そうした地元の動きをふまえ、発表者の担当授業では、地域固有の文化とその魅力を広く発信し、産業や消費を拡大すべく、さまざまな産官学連携プロジェクトを推進中である。そこで今回は、地域活性化を目標に活動を行い、市産業における主力分野ともいえる農業、商業さらには両者の相乗的発展に一定の貢献を果たした昨年度の実践事例を紹介したい。

大学の社会的役割として、次代の担い手となる人材育成に加え、近年は地域の交流と知的創造の場として機能することが求められている。その一方で、実際には在学生と校地周辺コミュニティとの接点が少なく、固有の文化理解や消費、継続的な地元定着等が低次元に留まっている。それゆえ、地元行政のビジョンや市民のニーズを踏まえた地域密着型の実践的な教育活動への取り組みが重要となる。こうした経緯から、昨年度は農産品を中心に、京田辺特有の文化的資産を最大限に活用して魅力を広くPRし、市の産業と消費を活性化することで、多角的なベネフィットを創出する試みを行った。授業では地場産業と固有文化についての実地学習を目指し、学生の主体的調査・企画活動と現場での協働作業、地域の方々との直接的な関わりを通して、多様な地域課題とニーズを分析し、解決のための企画を立案する。その実現には、行政や公共団体、企業・店舗や個人事業主等の協力を獲得し、相互補完に基づく地域社会への貢献を目指すことが必須となる。また活動成果や効果実績を広く発表し、外部評価を受けた上で更なる提案を再び地元フィードバックする。この構築的な作業プロセスに基づくプロジェクトは、単なる課外授業の枠を超え、複合的な利益をもたらし得る。すなわち、地域社会や文化・産業の活性化のみならず、学生のキャリアプラン策定や、大学の地域共生という指針実現の可能性を有するのである。こうした実行力／実効力を持ったコラボレーションの推進により、コミュニティ、行政、大学のネットワークと協力関係の促進によるメリットが拡大する意義は大きいといえる。

行政機関の地域振興ビジョンとも軌を一にする本活動は、地域一体型の文化・産業活性化に向けた実質的な方法論を提示するものである。企画に関わる全主体にとっての利益創出を実現するためには、行政（仕組み作りと支援体制）・地域社会と市民（取り組みの推進と消費主体）・教育機関（知的財産と人材の提供）が、各々の役割を全うして相互協力体制を築き、連携の成果と実効性を持続的に証明することが必要である。今後も地元密着型の活動を強化し、地域文化の活性化に向けた実践的な取り組みを継続・拡大してゆきたい。

【研究発表論題と要旨】 第7会場

5. 15 : 45 ~ 16 : 15

地域連携による「英語で交わる街づくり」の活動を通じた 異文化共生と市民の英語力改善の取組

山崎祐一（長崎県立大学教授）

近年、地域社会における官民協働の取組の重要性が叫ばれるようになってきている。地域を研究・学習のフィールドとして、例えば、大学や行政機関が地域と連携・協働し社会発展のために貢献することは、大学や行政機関、地域双方にとって有益であることは言うまでもないであろう。特に、大学生を含む地域市民が、過去に教室で学習した知識や獲得してきた技術を、地域社会での活動を通してホリスティックに応用し発展させていくことは、「実践力のある人材づくり」には非常に効果的な方法の一つと考えられる。また、このグローバル化した時代の中、伝統的な地域社会とは異なる新しいコミュニティは、「Think globally, act locally. (地球規模で考え、地域に根ざして活動する)」という生き方を基軸としており、外国人居住者の増加という現実には、異文化を背景とする他者との共生・異文化間コミュニケーションの成立がコミュニティの重要な指標であることを如実に物語っている。

長崎県佐世保市では、平成 29 年度より、グローバル人材が育つ街を目指し、「佐世保での生活＝英語が身に付く」という新たな価値を創出することを目的として、「英語で交わるまち SASEBO」プロジェクトに取り組んでいる。その背景には、前述のとおり、まず、佐世保市が米海軍基地と共存し、アメリカ文化が混在する豊かな国際性を有しており、グローバル人材の育成を進める土壌としての環境に恵まれているということがある。また、人口減少により経済が構造的な成長制約に直面していることや、マーケットの縮小によりグローバル化が拡大し、国内においても生産人口の縮小により外国人人材との共生の必要性が増大しているということがある。国際クルーズ船の入港や海外展開を目指す中小企業が外国人留学生を雇用する状況もすでに発生している。さらには、平成 32 年度より小学校で英語が教科化され、子どもたちの教育環境の充実と学力向上の必要性が増大しており、小学校教諭の英語教育スキル習得が必須になってきている。

本研究の主たる目的は、グローバル人材の育成の一環として官民協働で取り組んでいる長崎県佐世保市の「英語で交わるまち SASEBO」推進事業が、地域の異文化共生と地域市民の英語力改善にもたらす効果について検証することである。具体的には、歴史的にアメリカ文化や英語と共に生きている長崎県佐世保市における地域の人々や小中学校の英語教育に携わる教員の、外国人とのコミュニケーションと自らの英語学習に対する意識の変容や英語による対応の向上を追究し、その地域連携の実践が「英語が身につく街づくり」や「街の英語学習の活性化」にどのような影響を与えるかを検証する。地域における英語学習環境と異文化共生のさらなる課題を明らかにし、その有効な解決法を検討する。本発表では、昨年度からの取組内容と実践の経過を報告する。

1. 13 : 30 ~ 14 : 00

ドイツの学生歌「ランデスファーター」とフリーメイソンリー

五十棲愛璃乃（京都外国語大学大学院博士後期課程）

ドイツとオーストリアを中心に存在する学生結社（Studentenverbindung）において、学生の決闘の慣習などとともに育まれてきた「ランデスファーター（御国の父）」

（Landesvater）と呼ばれる儀式は、今日でも一部の学生結社において行われている。ランデスファーターは、18世紀頃から行われ、ドイツ学生歌の合唱や決闘の習慣をはじめとする様々な学生文化と並んで大きな意味を持つ儀式である。

この儀式は、主に、真剣を用いた決闘をしている「決闘規約を持つ学生結社」（Schlagende Verbindung）において行われているが、この儀式が「御国の父」と名付けられていることから窺えるように、祖国への忠誠を誓う愛国的な精神を帯びた儀式であることは明らかである。

ランデスファーターは、祖国への忠誠心を表す儀式として捉えられているが、その儀式の内容は、学生たちが身に着けている帽子に剣を突き刺し、帽子に穴をあけるという極めてユニークなものである。そして、その帽子は、剣を突き刺してあけられた穴を金糸や銀糸を用いて、オークの葉の形に刺繍が施されるなどして芸術的なまでに装飾され、日付を添えて縫い合わされることから、学生たちにとってこの儀式がいかに重要なものであったことは想像に難くない。

ランデスファーターが行われていた頃、学生結社ブルシェンシャフト（Burschenschaft）をはじめとするドイツの学生結社に所属する学生たちは、祖国に対する名誉を胸に抱き、祖国の統一のために活動が続けていたが、そのような当時の思想や学生たちの熱意が結びつき、彼らの思いを表現した形として具現化されたのが、このランデスファーターの儀式である。

すでに述べてきたように、ランデスファーターは、「愛国的」な要素を含む儀式であることは言うまでもないが、この儀式で歌われる学生歌「ランデスファーター」の歌詞やメロディーからは、フリーメイソンリー的な思想を看取することができる。その内容は、酒宴で盛り上がるような、ドイツ学生歌によく見られる酒と女をテーマにしたものとは異なる雰囲気を感じた歌であることをはっきりと印象づけている。

この発表では、ドイツの学生歌「ランデスファーター」について分析を試みるとともに、日本において、さらにはドイツにおいてもあまり知られていない「ランデスファーター」という儀式の内容について考察し、フリーメイソンリーとの関係性についても可能な限り明らかにしていきたい。

2. 14 : 00 ~ 14 : 30

19 世紀におけるドイツ教養市民層の名誉と決闘

菅野瑞治也（京都外国語大学教授）

19 世紀のイギリスやフランスにおいては、決闘という慣習が急速に衰退していくが、一方この時代のドイツの市民階級の男たちの間では、特に教養市民層を中心に決闘の数は増加の一途を辿った。

ドイツ教養市民層の中の決闘信奉者たちは、個人的な争いごとを解決・清算するための自分たちのやり方である「決闘」と、社会の下層階級の男たちの「殴り合い」のような粗野で野蛮な暴力とを明確に区別しようとした。決闘の慣習は、それまでは、貴族、学生、将校だけの排他的特権であったが、19 世紀の市民社会において、ドイツ教養市民層の男たちは、これと同等の権利を手に入れようとしたのである。なぜなら、彼らは、元来は貴族だけの特権であった決闘の属性としての「名誉のより高き自律性」は、貴族だけのものではなく、「教養があると感じている男たちの胸の中で醸成されるもの」であると、つまり、ある男がその名誉の恩恵にあずかるかどうかを決定するのは、受け継がれてきた特権ではなく、その男の「教養」であると考えたのである。

これに対して、決闘に批判的な 19 世紀のドイツ市民は、決闘という行為を、上層市民層が一般市民層に対して優越感を抱きたいがための「キザでわざとらしい振る舞い」として一笑に付した。それどころか、決闘が真の感情にほとんど活動の余地を与えず、個人にあまりにも厳格な規律を押し付けるが故に、彼らは、決闘のこの過度に洗練された上品すぎる側面を激しく非難した。

18 世紀の終りから 19 世紀の初め頃までのピストルの決闘は、両者が順番に交互に撃ち合うというやり方であり、侮辱を受けた者（＝決闘を申し入れた者）が最初に発砲し、その後でようやく相手（侮辱を与えた者＝決闘を挑まれた者）が撃ち返すというものであった。ところが 19 世紀が経過する中で、決闘は号令に従って決闘者双方がほぼ同時に相手に向けて発砲するようになり、決闘者の平等性・均等性が保証されるようになると、市民による決闘にますます拍車がかかった。

他ならぬ「教養」が、或いは、この時代の「啓蒙主義的な高度な教育」が、決闘する資格・権利を得ようと努力していた上層市民層の共通的特徴であることがやがて世間に認知されるようになった。「教養」は、市民にとって社会的出世に役立つというような実際の側面を越えて、貴族と同等の権利を手にしたいという市民の願望を満たし、その正当性を証明することを可能にする力を十分に有していた。

このような背景のもとで、19 世紀におけるドイツの市民階級の男たちの多くは、自律的な個人の確立と完璧に近い人間・人格形成を目指すためにも、決闘という慣習を必要としたのである。

3. 14 : 30 ~ 15 : 00

オーストラリアの高等教育システム改革期における大学副学長の思想と実践

澤田敬人（静岡県立大学教授）

本研究発表では博士論文『現代オーストラリアの高等教育システム改革—ドーキンズ改革による全国一元制への移行を中心に』の中で十分に採り上げていなかったシステム改革時の大学トップの思想と実践について論じる。1980年代末のジョン・ドーキンズ大臣による高等教育システム改革においては、1960年代から20年続いた高等教育二元制を全国一元制に転換させた。この改革は、オーストラリア経済の低迷を背景に途上国並みの経済状況をバナナ共和国と揶揄する中、競争に適した人材育成を経済合理主義の行財政改革パッケージに包んで実施したものである。規模の経済に基づく高等教育機関の統廃合、教育研究の市場化が進められ、その後の企業スタイルの大学運営に向けての先鞭をつけた。

オーストラリアにおける研究大学の一つであるメルボルン大学では、このシステム改革に際し、デヴィッド・ペニングトン副学長が、改革を進めるドーキンズ大臣に対して厳しい批判を行った。この改革に反旗を翻す批判の根拠となる思想は、西洋の大学史を起源から把握する姿勢であり、西洋大学史を味方につけ、ドーキンズ改革による歴史的に特異な方向を戒めた。ドーキンズ改革を批判しつつも、トップに立つメルボルン大学を改革から外れた大学にすることを意図するのでもない。西洋大学史の本流を継承し、組合主義、専門職主義、教養主義をまとめ合わせて、独自の風格をメルボルン大学に与えた。この思想は、21世紀の現在も歴代副学長に引き継がれ、その独特なカリキュラムをメルボルンモデルと呼んでいる。歴代副学長の大学をめぐる発言も注目を集めている。ペニングトン副学長以降の大学トップの思想をまとめ、高等教育システム改革と対峙し、維持するべきところを維持して状況を変化させる実践のための思想のあり方を考察する。

【研究発表論題と要旨】第8会場

4. 15 : 15 ~ 15 : 45

インターンシップに関する政策的言説とその実践 —文藻外語大学の実践例を中心に—

董莊敬（文藻外語大学副教授：台湾）

近年、若年者の高失業率や高等教育の機能不全により、学校から職業への移行困難者が急増している。こうした社会背景に鑑み、「学校と職業との接続」を強化すべきだという「学校教育の見直し論」が注目の的となり、2005年以降、職業技術教育改革を中心とする一連の施策が実施されてきた。また、2015年1月14日「技術及び職業教育法（技術及職業教育法）」が公布された。その趣旨に従い、2017年に「技術及び職業教育政策綱領（技術及職業教育政策綱領）」（教育部 2017）が制定された。これらの法整備により、技術職業教育の発展の方向性が法的に位置づけられたと言える。こうした政策的言説から、キャリア教育の一環としてのインターンシップの重要性が浮き彫りになった。

そこで、本稿では、インターンシップに関する政策的言説からキャリア教育の射程を明らかにする。また、文藻外語大学のインターンシップの実践例を取り上げ、インターンシップの教育効果と問題点に触れる。

キーワード：インターンシップ、キャリア教育、技術職業教育

5. 15 : 45 ~ 16 : 15

台湾における日本語とその表現文化の機能
—海外文化に対するグローカル化の成功事例として—

落合由治（淡江大学教授：台湾）

この発表では、日本語の表現文化がそれぞれの異文化社会に受容される際にグローバル化での支配的言語とは異なる機能を果たしている点に注目して、台湾での事例を中心にそのグローカル的役割を考察する。グローカル化はグローバル化に対する人類学の用語で、上杉富之（2014）によれば、グローバル化の影響には「それが到達した地域や地方の伝統的かつ固有の社会や文化を圧倒して崩壊させ、消滅させる」「均質化論」と「グローバル化した文化要素と地域・地方の伝統的な文化要素を結びつけて雑種化したり、伝統的な要素を刺激して新たな文化を生成させるなど文化を多様化させる」「多様化論」があるが、それに対するグローカル化は、「グローバリゼーションとローカリゼーションが同時ないし連続して起こる」「同時進行性」と「グローバリゼーションとローカリゼーションが相互に作用・影響を及ぼす」「相互作用性」に注目した概念で、特に中心文明の周縁に見られると述べている。²このグローカル化の概念を用いると、中国の周縁独立国家・台湾の社会経済的動きを見るときに非常にその社会的特徴が理解できる。台湾は歴史的に多重性多様性に富む多民族多言語社会で、常に外来の強国に侵略されつつ地域的独自性とアイデンティティを保ち、現在は独自の多民族多文化併存の中、中国の妨害で大多数の国家と正式な外交関係を持ってない状況でも世界各国と交流し、経済面、技術面で独自の地位を維持している。グローバル化を進める中華圏、英語圏の言語・文化を制度・組織面では受容しながら、その一方で各家族や個人の生活面では日本語と日本文化を楽しむ等、支配的言語・文化と異なる選択肢を保ち、常に支配文化からの差延化をおこなって、深刻な国内での対立を回避しながら多様性を保つ動きを続けている。そのグローカル化は、グローバル化の進行による深刻な経済格差の拡大により民族対立、異文化対立が世界各地に広がる現在、従来の支配被支配や多文化共生の構造とは異なる社会的動きを見せている。この発表では、以下の点を中心に台湾でグローカルな機能を中心的に果たしている日本語とその表現文化の位置を考察する。

- (1) 台湾社会の多元性多様性維持の事例
- (2) 台湾社会での日本語と日本の現代表現文化の位置
- (3) 日本語から見た台湾社会の異文化に対するグローカル化的対応の事例
- (4) 周縁としての台湾社会のグローバル化戦略とその現代的意義

² 上杉富之（2014）「グローバル研究を超えて—グローカル研究の構想と今日的意義について—」『グローカル研究』1、pp. 1-20 参照。

【研究発表論題と要旨】第9会場

1. 13:30～14:00

文体についての考察 —イシグロ・カズオ「浮世の画家」より—

林裕二（西南女学院大学教授）

イシグロ・カズオの *An Artist of the Floating World*（浮世の画家:1986）は、*A Pale View of Hills*（遠い山なみの光:1982）に続いて日本を舞台にした二作目の小説である。三作目の *The Remains of the Day*.（日の名残り:1989）などの作品で、イシグロ・カズオは、2017年にノーベル文学賞を受賞した。

イシグロは5歳まで長崎で暮らし、それから親の仕事の関係で渡英し、1983年に英国籍を取得している。英語の monolingual である日系イギリス人作家（Steven G. Kellman による）の記憶に残る日本を舞台に描いている。敗戦後の日本に生きる老画家の小野益次（漢字表記は飛田茂雄訳による）が一人称主語の語り手である。太平洋戦争中の戦意高揚に協力したことの回想と下の娘の見合い話を軸に物語りは進む。

幼い頃に離れた生まれ故郷の景色を描く場面もあるが、その描写はぼんやりしている。登場人物間の会話では、日本語話者からすると妙な場面が散見される。そこには呼称の問題が含まれる。また、一人称主語の語りの最大の利点—主人公に思う存分に語らせることで読み手に共感させる—という点をあえて使わない場面が何度も登場する。そのことは、この一人称の語り手への読者の共感を揺さぶり始めることになる。

当発表では、先ずは呼称から浮かび上がる人間関係を読み解く。続いて一人称主語の語り手に、その語りの特権を敢えて十分には駆使させない場合に、作家はどのような文体を使い、主人公の心情を伝えているのかを考察する。

2. 14 : 00 ~ 14 : 30

『春』の基本構造

林盛奎（白石大学校教授：韓国）

一 はじめに

藤村は『破戒』を書くことによって、喪失された個の発見、自我問題の拡大など日本文学において、これまであまり追究されたことのない前代未聞ともいえるべき小説のテーマを作品化することに大きな成功をおさめることができた。しかし、藤村は自分の文学の創作過程で『破戒』に差別思想を取り入れ、人生追究の難しさに直面したものの、これらは一つの試みで終わることになる。もちろん藤村もこれらの問題点に気づく。

二 「理想の春」をめぐる

『春』で藤村は、「理想の春」に欺かれて死ぬ青木と、「芸術の春」を求めて失敗する岸本を主題にしている。「理想の春」に欺かれて死ぬ人物を青木に託して（モデルは北村透谷）描き、「芸術の春」を求めて失敗する青年及び「人生の春」に到達した青年を岸本によって描こうとする藤村の意図は明らかである。

しかし、「理想の春」に欺かれて死ぬという時、「理想の春」の敘述の内容は明瞭ではない。「理想の春」に欺かれるという意味も、欺かれて死ぬという論理関係も明らかではない。笹淵友一は、「理想の春」に欺かれて死ぬという敘述を解く鍵が「藤村詩集」の序にあると言っている。

三 「芸術の春」をめぐる

藤村が透谷と最初に会ったのは、透谷の短い生涯のほぼ晩年に近づこうとする頃であった。藤村は巖本善治の宅で初めて透谷に紹介された。「女学雑誌」に載った『厭世詩家と女性』の感動がその機縁である。「恋愛は人生の秘鑰なり、恋愛ありて後、人世あり。恋愛を抜き去りたらむには人生何の色味かあらむ。然るに最も多く人世を觀じ、最も多く人世の秘奥を究むるといふ詩人なる怪物の最も多く恋愛に罪業を作るは抑も如何なる理ぞ」「恋愛あらざる内は、社会は一個の他人なるが如くに頓着あらず」「誰か能く厭世思想を胎生せざるを得んや。誠信を以て厭世思想に勝つことを得べし。然れども誠信なるものは真に難事にして」（『桜の実の熟する時』九）。この論文を読んで藤村がどんなに感激したかは『桜の実の熟する時』の中に記されている。これらの透谷の言葉は、人生における恋愛の意義、文学における恋愛のありかた、信仰と厭世思想など、これ以後の藤村の歩みに大きな影響を与える。

「芸術の春」を求めて失敗する青年が岸本であることは確かである。しかし、「芸術の春」を求めて失敗するという時、〈芸術の春〉の敘述内容は明確ではない。〈求めて失敗する〉という意味も明らかではない。『春』の内容に従って言えば、「芸術の春」の〈芸術〉は〈文学〉になり、〈求めて失敗する〉のは恋愛であろう。そもそも岸本の関西漂泊の契機は、勝子への恋から来る。「胸の苦痛を忘れようとした」（十五）ための放浪である。

四 「人生の春」をめぐる

『春』は「芸術の春」を見ぬままに、岸本の旅で終わる。そこには『春』という題名が示すような明るい「人生の春」は描かれていない。実際に藤村は、この時期に仙台の時代を迎え、「芸術の春」と呼ぶほど旺盛な詩作を見せる。しかし『春』には、「人生の春」に到達しようとした青年はもとより、「芸術の春」を咲かせる過程である仙台時代のことは描かれていない。ただ『春』は「芸術の春」を求めて失敗する青年を描いているだけである。

この〈一生の夜明け〉〈生の曙〉というべき仙台の時代は、作中にはもり込まれていない。初版本朝日新聞の最終章は「春と考へるには、自分の若い命はあまりにも惨憺たるものであつた。吾生の曙はこれから来る一まだ夜が明けない」という〈真冬〉の時代で終わる。

「人生の春」の背景である仙台は作品中には登場しない。この点について三好行雄は「人生の春」という主題は執筆の過程で〈家〉の発見によって変更もしくは瓦解したと論じた。

そこには、冬の厳しさに堪えて、春を待つ作家藤村のパターンが定着する。『春』はまさに冬の時代である。「人生の春」の「具体化は、彼の生活哲学では課題として常に残されることになるのではないか」という指摘もある。まさしく仙台時代に、藤村は「人生の春」を迎えることになる。しかし、それも束の間、理想の人生を求めてもなお、「人生の春」を得られない苦しみは、詩人時代の藤村より引き続いたもので、『若菜集』に歌われた「哀歌」「天馬」「草枕」などに見られ、『一葉集』の中の「春やいづこに」「鷺の歌」などにもそれが見られる。藤村にとって、「人生の春」というのは、〈生の夜明け〉〈生の曙〉であった。仙台で送った一年は藤村に「自分の生涯の中で最も忘れがたい月日の一つ」(「仙台の二日」)をもたらした、まさに〈伝説〉のようなものであった。

岸本は〈冬の季節〉の最中であって、〈生の夜明け〉〈生の曙〉を期待し続ける。人生がいかに〈暗黒〉なものであり、〈惨憺〉たるものであっても、そこには待つべき何ものかがある。それゆえ藤村は、岸本に「春」を待たせているのである。

各作品の最終章に表れている藤村の言葉をひき比べれば、藤村が〈冬の季節〉の最中であって〈春〉を待っていたことがわかる。

「屋外はまだ暗かつた」(『家』)、

「春が待たれた」(『新生』第一部)、

更に、「わたしは三十年の余も待つた。おそらく、わたしはこんな風にして、一生夜明けを待ち暮らすのかも知れない」(「太陽の言葉」と言い、「こころのはる」を待つ。それほど仙台の感銘(「人生の春」)は長く藤村の心に残った。

これが、『春』以来の藤村の文学観となり、人生観となった。

【研究発表論題と要旨】 第9会場

1. 14 : 30 ~ 15 : 00

日系ブラジル人のネットワーク活動が帰属意識に与える影響研究

林永彦（全南大学校教授：韓国）
金泰永（江陵原州大学校教授：韓国）

本研究の目的は日系ブラジル人を対象に彼らのネットワーク活動がブラジル人の帰属意識にどのような影響を与えたかを考察することである。研究の方法は名古屋大須地域と8番団地周辺に居住している日系ブラジル人を対象に2017年2月から5月まで質問調査表200部を配布して130部が収集され、その中で99部を本論文の分析に用いた。日系ブラジル人のネットワーク測定指標については日本人ネットワーク、日系ブラジル人ネットワーク、トランスナショナルネットワークなど大きく三つに分けて概念化し質問調査を行った。本研究の分析結果は次のとおりである。

第一に、日系ブラジル人のネットワーク特徴に対する記述統計とt-test分析結果、日系ブラジル人のネットワーク活動に影響を与える人口統計学的項目は職業、婚姻状態、日本語水準などであった。詳しくは生産製造職より専門職、既婚よりも未婚、日本語の水準が高いほどネットワーク活動が活発であった。その他宗教、ブラジルへの家族有無、ポルトガル語の水準などは統計的な有為性はなかったが統計的な差は見られた。

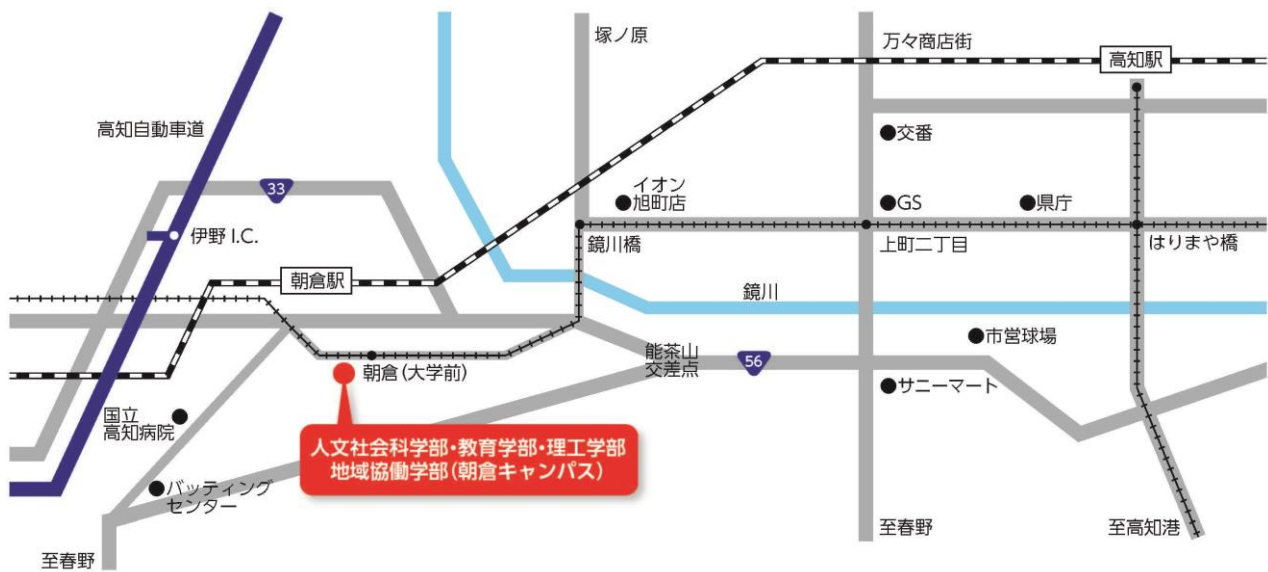
第二に、t-test,ANOVA分析結果、日系ブラジル人のネットワーク活動に影響を与える社会団体活動項目は社会団体活動有無、情報文化団体活動有無、情報文化団体活動満足度などが統計的に有為であった。日系ブラジル人の中で社会団体に加入し活動する人、情報文化団体に加入し活動する人、情報文化団体活動の満足度が高いほどネットワーク活動も活発であった。

第三に、相関関係の分析結果、日系ブラジル人のネットワーク活動と帰属意識の相関係数は統計的に有為であった($p < .01$)。日系ブラジル人のネットワーク活動と帰属意識は相互正の相関関係であり、日系ブラジル人のネットワーク活動が活発であるほど帰属意識も高くなる傾向が現れた。

第四に、回帰分析結果、日系ブラジル人の帰属意識に影響を与えている要因はポルトガル語であり、ポルトガル語の水準が高いほど日系ブラジル人への帰属意識が高くなる傾向があった。日系ブラジル人の中で学歴が低いほど、ポルトガル語の水準が高く社会団体活動の満足度が高いほど日系ブラジル人への帰属意識が高く見られた。

結論的に、日系ブラジル人のネットワーク活動が彼らの帰属意識に与える影響の分析の結果、日本語の水準が低くポルトガル語の水準が高いほどネットワーク活動も活発であり、日系ブラジル人に対する帰属意識も高くなる傾向を見せた。このような研究結果は日本政府が日系ブラジル人の日本社会への統合と共生を高めるため、日本語の水準を高める必要があることを示している。

会場校（高知大学朝倉キャンパス）までのアクセス



高知大学朝倉キャンパス 〒780-8520 高知市曙町二丁目5番1号52-1

●高知竜馬空港から

空港連絡バスで約35分「はりまや橋」か、約40分「JR高知駅」下車→バス、路面電車またはJR土讃線へお乗り換えください。

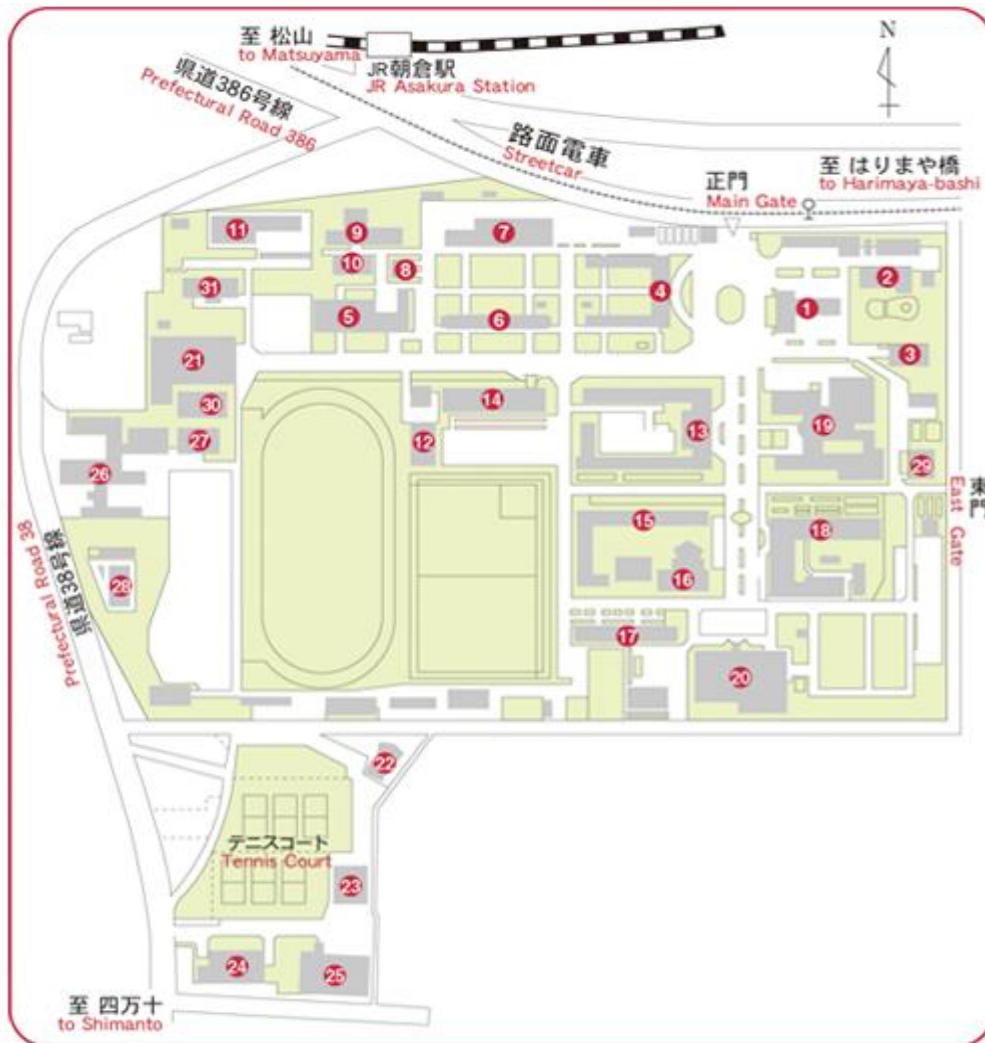
●はりまや橋から

バスで約20分「朝倉高知大学前」下車
路面電車で約30分「朝倉（高知大学前）」下車すぐ

●JR高知駅から

バスで約25分「朝倉高知大学前」下車
路面電車で約30分「朝倉（高知大学前）」下車すぐ
JR土讃線下り15分「朝倉駅」下車徒歩3分

朝倉キャンパスマップ

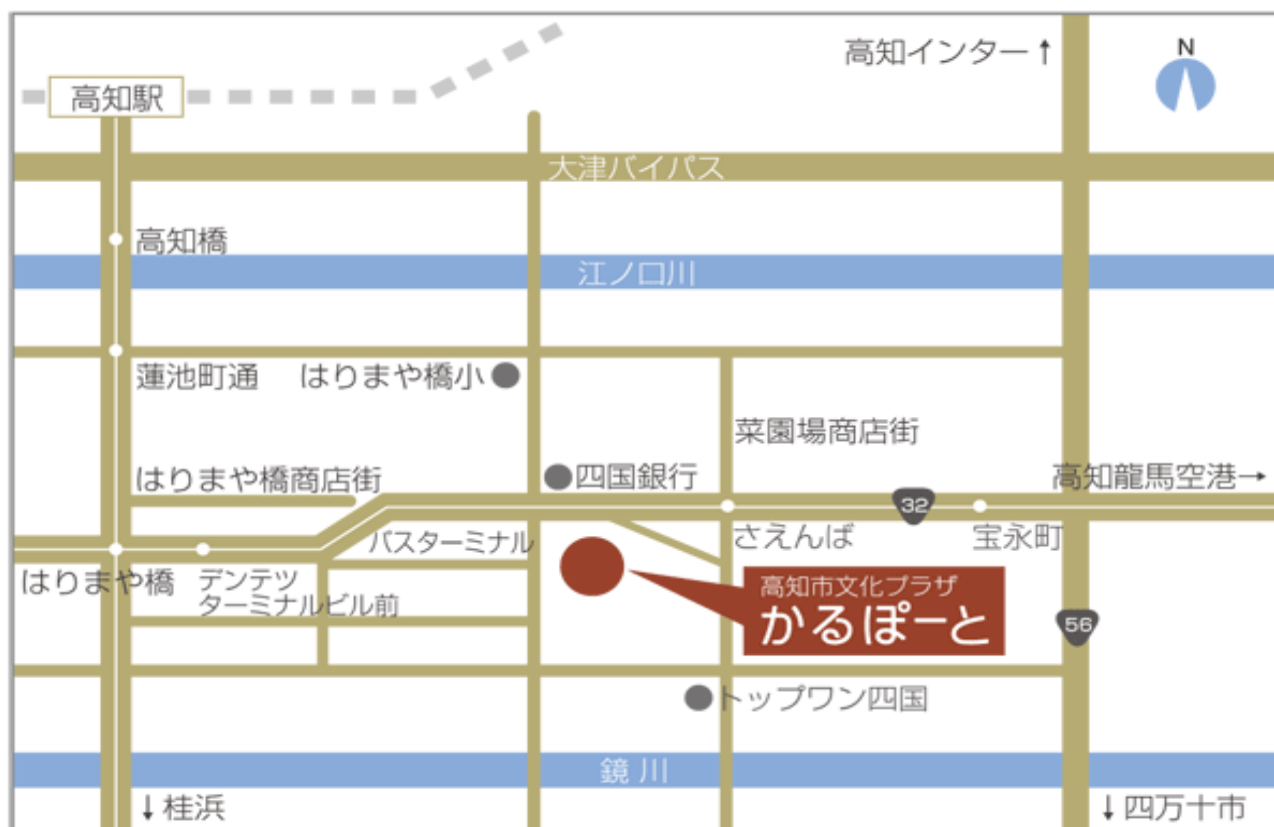


※地図中の番号に対応しています。

- ① 本部管理棟
- ② 共通教育1号館・学生サービスセンター
- ③ 共通教育2号館
- ④ 共通教育3号館
- ⑤ 人文社会科学部棟
- ⑥ メディアの森・学術情報基盤図書館
- ⑦ 学生会館（高知大学生協 IKUS）

※2018年5月18日（金）

かるぽーとへのアクセス（編集委員会・理事会・会場）



住所 〒780-8529 高知市九反田 2-1

アクセス

高知駅より

●電車で とさでん交通 はりまや橋下車 徒歩5分 / 菜園場町下車 徒歩3分

●バスで とさでん交通 はりまや橋下車 徒歩5分

高知龍馬空港より

●車で30分

●空港連絡バスで30分 はりまや橋観光バスターミナル下車 徒歩1分

お問い合わせ

[高知市文化プラザ共同企業体](#)

代表 Tel : 088-883-5011

【ホール・ギャラリーのご利用】

Tel : 088-883-5015 / Fax : 088-883-5016 / Email : info@culport.jp

[公益財団法人高知市文化振興事業団](#)

【自主事業・公民館事業のお問い合わせ】

Tel : 088-883-5071 / Fax : 088-883-5069 / Email : kikaku@kfca.jp

【公民館の施設利用のお問い合わせ】

Tel : 088-883-5061 / Fax : 088-883-5069 / Email : kikaku@kfca.jp

【横山隆一記念まんが館】

Tel : 088-883-5029 / Fax : 088-883-5049 / Email : mangan@kfca.jp

比較文化論 No.36

発行 2018年4月15日

日本比較文化学会事務局

〒574-8530 大阪府大東市中垣内 3-1-1

大阪産業大学国際学部国際学科

藤岡克則研究室内 日本比較文化学会事務局

日本比較文化学会第40回全国大会・2018年度国際学術大会準備委員会事務局

〒780-8720 高知県高知市曙町 2-5-1

高知大学朝倉キャンパス

人文社会科学部 奥村訓代研究室

電話：088-844-8205

(緊急時用連絡先：090-2780-1591)

印刷：

有限会社エコーサービス

〒780-8034 高知県高知市南河ノ瀬町 79-2